

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8001

業務実績書(受託事業)

研No.6-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	高知県竹林寺客殿調査(受託)((1)－③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 箱崎和久(都城発掘調査部遺構研究室長)、番光、高橋知奈津(以上、研究員)			
【年度実績概要】 本受託事業では、高知市五台山に所在する竹林寺客殿及び庭園の調査を行った。竹林寺客殿はすでに高知県保護文化財として指定され、一定の評価を受けているが、これまでその造営の経緯については意見が分かれていた。さらに詳細な調査を行うことにより文化財の価値を明らかにすることを目的とする。 竹林寺客殿の建造物及び庭園について、技法調査、痕跡調査、復元調査、破損調査などの詳細調査を実施し、調書の作成及び大判写真撮影を行った。また、周辺地域における竹林寺客殿の特徴や位置づけを明らかにするために高知県、香川県に現存する書院建築について類例調査を行った。調査成果は 24 年度に報告書として刊行した。 調査の結果、客殿が玄関と同時の文化 13 年(1816)に建築されたことを明らかにした。また、江戸時代後期としては珍しい正統的な書院建築の形式を備えた上質な建築であることを明らかにした。建築、庭園調査によって、改めてその歴史的価値を明らかにした調査・研究として評価できる。			
			
竹林寺客殿			
【実績値】 調査票 10 枚、調査野帳 15 枚、デジタル写真 880 点 「竹林寺客殿の庭園調査報告書」2012. 11			
【受託経費】 2,924 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8002

業務実績書(受託事業)

研No.6-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	兵庫県近代和風建築総合調査(受託)((1)－③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】	箱崎和久(都城発掘調査部遺構研究室長)、番光、鈴木智大、海野聡(以上、同部研究員)、松下迪生(同部特別研究員)		
【年度実績概要】	前年度から3ヵ年を予定している本受託事業では、兵庫県内に所在する明治から昭和初期にかけて建設された文化財的価値を有する近代和風建築のうち、本年度は兵庫県文化財課が行った一次調査の結果から選定された59件の物件について、その歴史調査、実測調査、技法調査、写真撮影を実施し、配置図及び平面図の作成と文化財としての学術評価を行った。調査成果は学術評価原稿、配置図及び平面図、写真について提出した。 調査では、兵庫県内の各市町村から1件以上を条件として、各市町村に所在する近代和風建築を現地調査した。建築類型の上では、公共建築として学校、博物館を、住宅建築として町家、農家、邸宅、別荘を、宗教建築として寺院、神社を、商業建築として旅館、料亭をと、多岐にわたる対象を調査した。 調査の結果として、これまで不明瞭であった兵庫県における近代和風建築の現存状況と、建築類型の広がり幅が明らかになったこと、近代和風建築の技術の具体相が明らかとなったこと、近代和風建築に関わった施主、設計者、施工者の具体名が多数明らかとなり、近代兵庫における建築事情が解明されつつあることがあげられる。本調査は、文化庁が行っている全国の近代和風建築調査の一環として実施しているものであり、兵庫県に留まらず、日本全体における近代和風建築の研究と保存に対して多大な貢献をなす成果を上げ得るものとする。		
【実績値】	調査票 110 枚、実測野帳 260 点、デジタル写真 6600 点、報告書原稿 188 ページ。		
【受託経費】	1,843 千円		



旧加東郡公会堂(加東市)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8003

業務実績書(受託事業)

研No.6-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	比叡山延暦寺建築調査(受託)((1)―③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 箱崎和久(都城発掘調査部遺構研究室長)、海野聡、高梁知奈津(以上、同部研究員)、高妻洋成(埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長) 赤田明倫(同特別研究員) 登谷伸広(客員研究員)			
【年度実績概要】 前年度から2ヵ年で実施している本受託事業では、延暦寺山内に所在する建築物の悉皆調査を行い、そのうち文化財的価値の高い物件については詳細調査を行って、今後の保存と活用に資することを目的とする。前年度に悉皆調査をほぼ終え、本年度は詳細調査を行った。坂本滋賀院、慈眼堂、生源寺、飯室谷不動堂等の実測調査、技法調査、写真撮影を実施し、平面図、断面図の作成と文化財としての学術評価を行った。 調査では、中世から現代に至る山内の全ての建築を実査し、このうち絵様等の調査を通じてこれまで必ずしも明らかでなかった近世前期の比叡山における造営の事情がどのようなものであったかを明らかにした。調査成果は特論原稿とともに提出し、延暦寺で報告書を出版した。 世界遺産延暦寺の今後の保存管理に資するとともに、近世の大社寺造営の諸相を実地に研究するものとして評価できる。			
			
生源寺本堂			
【実績値】 調査票 47 枚、実測野帳 260 点、デジタル写真 3800 点、報告書原稿 230 ページ。			
【受託経費】 851 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8004

業務実績書(受託事業)

研No.6-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成 24 年度旧高梁尋常高等小学校本館建造物調査（受託）（(1)－③）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 清水重敦（前景観研究室長）、			
【年度実績概要】			
本受託事業は、岡山県高梁市に所在し、現在は高梁市郷土資料館として活用されている旧高梁尋常高等小学校校舎（明治 37 年建築）の建築的価値を明らかにするための調査を実施するものである。 本年は、前年度に引き続き当該建物の実測調査、建築的特徴・復原考察を行う調査票の作成、建物の沿革等に関する史料調査、破損調査、写真撮影を実施した。 前年度の調査により、棟札及び竣工時の写真より、設計者とその関与範囲が判明した。この建物は様式、技術ともに本格的な西洋建築をよく咀嚼しており、文部省の設計関与が想定されるが、設計者は地元大工の妹尾友太郎であった。近隣の公共建築建設に参加することで西洋建築を学んでいったことが想定され、近代における建築技術と様式の伝播を具体的に示す好例として評価することが可能となった。また、本年度の調査により梁間 6 間に及ぶ 2 階大引を 1 本の材で通しており、地元臥牛山のモミを切って材料を調達したという言い伝えがほぼ裏付けられる結果となった。 また、関連して、高梁の旧城下町地区内に現存する明治期の洋風建築を類例として視察し、調査票作成、写真撮影を実施した。 調査成果について、報告書にまとめて印刷刊行を行った。			
		旧高梁尋常高等小学校校舎外観	
【実績値】 実測野帳等 20 枚。デジタル写真 400 点、4×5 ポジ写真 8 点 「旧高梁尋常高等小学校本館建築調査報告書」2013.3			
【受託経費】 966 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8005

業務実績書(受託事業)

研No.6-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成 24 年度平出地区伝統的建造物群保存対策調査 (受託) ((1)－③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 恵谷浩子、菊池淑人 (以上、景観研究室研究員)、箱崎和久 (都城発掘調査部遺構研究室長)、黒坂貴裕 (同部主任研究員)、鈴木智大、海野聡 (以上、同部研究員)			
【年度実績概要】 本年度から 2 ヶ年で実施する予定の本受託事業では、長野県塩尻市宗賀にある平出集落の伝統的な建物群について、今後の保存と活用の基礎となる調査及びその報告書作成を目的とする。 調査は、集落の歴史・集落構造・伝統的建造物について対象としている。また、市内の伝統的な集落において類例調査も行っている。 本年度は、平出地区で 7 棟、類例として 2 棟の建物詳細調査 (実測・聞き取り・写真撮影) を行った。実測図面に関しては、順次図化を行い、9 棟分の平面図作成を済ませた。 この集落及び周辺地域の民家は、規模の大きな切妻屋根で本棟造りと呼ばれる。また、山裾に湧く泉から水路を延ばし、水の利用が暮らしに根付く点はこの地域の集落の特徴である。平出集落は、本棟造り民家と水路の良好な残存状況を示し、地域の代表的な伝統的集落と評価することができる。本事業は、伝統的な集落と建造物の文化財としての価値を明らかにし、保存管理に向けた計画立案に資することができると考えられる。			
			
平出集落の本棟造り民家			
【実績値】 調査票 9 枚、実測図 20 枚 (平面図 9 枚、配置図 9 枚、矩計図 2 枚)、デジタル写真 2,978 点、空中写真 4 枚			
【受託経費】 1,500 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8006

業務実績書(受託事業)

研No.6-6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長谷川家建造物・屋敷内現況調査業務委託（受託）（(1)－③）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 青木達司（主任研究員）、黒坂貴裕（都城発掘調査部主任研究員）、番 光、海野聡、高橋知奈津（以上、同部研究員）、中村一郎（企画調整部写真室主任）、鎌倉綾（同部技能補佐員）			
【年度実績概要】 本受託事業では、松阪市魚町・殿町に所在する長谷川家住宅の建造物及び庭園の調査を行った。松阪市に寄贈される予定である長谷川家住宅の歴史的価値を裏付ける学術的根拠をまとめ、歴史的建造物としての保存・活用計画を作成するための基礎的資料とすることを目的とする。 長谷川家住宅の建造物及び庭園について、技法調査、痕跡調査、破損調査などの詳細調査を実施し、調書の作成及び写真撮影を行った。長谷川家に所蔵される家相図等造営関係の資料に3点について、高精細デジタル写真撮影を行った。また、松阪市に所在する近世町家の類例調査として、小津家旧宅、見庵の調査を行った。調査成果は平成25年度に報告書として刊行する予定である。 調査の結果、主屋が少なくとも3度の増築を行っていることが増築部の棟札や痕跡調査などから明らかになった。土蔵5棟のうち4棟の年代（最古のものは大蔵の享保6年）が棟札や墨書から明らかになった。また、殿町の明治期離れ、魚町の大正座敷など、近代の屋敷地の変遷もおおよそ明らかになった。これまで長谷川家住宅に関する調査・報告は今までなく、その歴史的価値を明らかにした調査・研究として評価できる。			
			
長谷川家住宅主屋魚町通り側外観（北東から）			
【実績値】 調査票 15 枚、調査野帳 25 枚、デジタル写真 1,620 点、高精細デジタル写真 8 点。			
【受託経費】 962 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8007

業務実績書(受託事業)

研No.12-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺休ヶ岡八幡宮境内の発掘調査(受託)((1)－⑥－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 小池伸彦(考古第一研究室長)・神野 恵(主任研究員)・川畑 純(研究員)・松下迪生(特別研究員) 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 ・調査の概要 平城第496次調査として実施した。調査期間は24年7月4日～7月6日。調査区は史跡薬師寺休ヶ岡八幡宮の境内にあたり、トイレ浄化槽の設置に伴う発掘調査である。調査面積は東西2m、南北3.3m、面積6.6㎡。 ・調査の内容 休ヶ岡八幡宮は平安時代に創建され、中世には幾度の罹災と再建が記録されている。現存する社殿は慶長元年(1596)の地震で倒壊したものを慶長8年に豊臣秀頼が再建したものである。発掘調査区は現存の八幡宮に取り付く北面の座小屋が推定される位置であるが、調査の結果、中近世の遺構は残存していないことが判明した。地山はGL-70cm付近で検出し、その直上まで昭和時代の遺物を含む。なお、楼門と南面の座小屋が推定される位置で行った発掘調査(平城第131-22次)では、地山面で奈良時代の遺構を検出しているものの、今回の調査区は面積が狭小なこともあり、地山面でも遺構は検出できなかった。 ・周辺調査を含めた成果 本調査区で検出した地山はGL-70cmであったのに対し、現存する座小屋の礎石上面は、本調査区のGL-10cmであることから、近世の遺構面は大きく削平されていることが判明した。北面座小屋の南面に細長いトレンチを入れた平城第475次(平成22年度)の調査成果と合わせると、地形が東から西に向かって下がることになる。この高い部分にさらに盛土を施して八幡宮を造営したが、地震によって座小屋及び門が倒壊し、南北の座小屋は倒壊を免れた部分で切りそろえられ、南北で長さが異なる現在の状況になったらしい。座小屋の倒壊以降、調査区は大きな削平を受け、GL-70cmまで現代の盛土が堆積したものとみられる。地山直上まで昭和時代の遺物を含むことから、現在の地形は昭和時代に入って盛土されたものであることも明らかとなった。			
			
調査区全景(南から)			
【実績値】 (参考値) 記録作成数：写真 4枚(カラー2枚、白黒2枚) 実測図 3枚 出土遺物：中世～近世の陶磁器×整理箱1箱、軒丸瓦×2点、軒平瓦×1点、丸瓦×102点、平瓦×848点			
【受託経費】 89千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8008

業務実績書(受託事業)

研No.12-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺食堂跡発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 芝 康次郎・石田由紀子(以上、研究員)・馬場 基(主任研究員)・ 箱崎和久(遺構研究室長)・荒田敬介(特別研究員)、 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部研究員)			
【年度実績概要】 ・調査概要 調査地は、大講堂の真北に位置し、その一部は過去に近畿大学や奈良文化財研究所により発掘調査が行われている。今回は、食堂全面を発掘調査対象とし、調査区は南北約26m、東西約50mで、面積は約1300㎡である。調査期間は24年9月24日～25年3月22日。なお、土置場を確保するため、発掘を東西2回に分けて行った。調査成果は25年1月24日に報道発表し、25年1月26日には現地説明会を行い、714名の参加があった。 ・食堂の遺構 礎石は全て抜き取られていたが、礎石抜取穴のほか、基壇外装の一部である地覆石や階段の下部(いずれも凝灰岩製)を検出した。階段は基壇南面に中央と東西の3ヵ所確認している。階段の幅は3.7m(12.5尺)、出は約75cm。これらの遺構により、薬師寺食堂は桁行11間、梁行4間の礎石建物で、基壇規模は、東西約47.1m(159.1尺)、南北約21.6m(73尺)と判明した。建物規模は、現時点では、桁行は中央間を4.4m(15尺)、それ以外は3.7m(12.5尺)等間とし、総長を41.4m(140尺)、梁行は身舎2間を4.3m(14.5尺)、廂3.7m(12.5尺)として総長16.0m(54尺)とする復元案と、桁行3.7m(12.5尺)等間で総長40.7m(137.5尺)、梁行は身舎2間を4.3m(14.5尺)、廂3.7m(12.5尺)とする復元案の両方が考えられる。ただし、前者のほうが雨落溝や『薬師寺縁起』とも大きな矛盾はない。また、基壇周辺では、南面で雨落溝と石敷を検出した。基壇築成は、整地後に版築を施し、さらに礎石下部分のみ壺地業を行っている。壺地業は、廂部分で深く、身舎部分で浅い傾向にある。これらは奈良時代の造営当初のものとみられ、平安時代にはこれを踏襲して再建したとみられる。 ・食堂以前の遺構 食堂基壇下の整地土面で石敷及び掘立柱穴列を部分的に検出した。整地土には奈良時代の瓦を含むため、これらは薬師寺の造営に関連する施設の可能性がある。 ・食堂廃絶後の遺構 基壇南部を破壊する大土坑を検出した。大きさは東西約22m、南北約9m。ここからは、奈良時代から鎌倉時代にかけての膨大な量の瓦や、13世紀末～14世紀初頭の瓦器碗や土師皿などが出土した。また、基壇北部で近世の南北方向の土管暗渠を2条検出した。いずれも南から北に向かって水を排水する装置である。			
			
			調査区全景(南東から)
【実績値】 論文等数: 3件 『薬師寺 旧境内保存整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ』法相宗大本山薬師寺 2013. 3 石田由紀子他「薬師寺食堂の調査 一第500次」『奈良文化財研究所紀要2013』奈良文化財研究所、2013. 6(予定) 石田由紀子「薬師寺食堂の調査(平城第500次)」『奈文研ニュースNo.48』奈良文化財研究所、2013. 3 発表件数: 1件 記者発表; 平成25年1月24日。現地説明会; 1月26日。聴衆714名。 (参考値) 出土遺物: 土器コンテナ20箱、軒瓦300点、丸瓦・平瓦2000箱。 記録作成数: 実測図(A2判)60枚。遺構写真(4×5)370枚。			
【受託経費】 22,157千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8009

業務実績書(受託事業)

研No.15-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査業務(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 黒坂貴裕、今井晃樹、庄田慎矢、荒田敬介(以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、星野安治(埋蔵文化財センター)			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、檜隈寺中心伽藍跡の南東方向で擁壁工事計画に先立ち、昨年度の調査で素掘溝を確認していた丘陵の南東裾部分について調査を実施した。調査期間は24年8月1日～9月7日。調査面積は50㎡である。 調査の結果、素掘溝2条(SD940・SD943)を確認した。素掘溝SD940は昨年度確認した素掘溝の北側延長部分である。溝底面の標高から南東から北西へ水が流れたと見られ、幅2.0m、深さ85cmの規模である。丘陵の地形に沿って、北への延長は檜隈寺中心伽藍の東側に延びると見られる。素掘溝SD943は幅1.0m、深さ30cmで、SD940から枝分かれして北東方向へ延びる。埋土の状況からSD940と一連の溝であることが判明した。遺構から出土した遺物は6世紀末頃の土器や瓦が出土したため、今回の素掘溝は檜隈寺の成立に関わる時期の遺構と考えられる。 本調査では、素掘溝SD940について昨年度の検出分と合わせ18m分を確認したことになる。この溝の長さに加え、その規模は生活・耕作関連の遺構とは考えられず、檜隈寺に関連すると判断される。したがって、檜隈寺の成立や寺域などの解明に繋がる重要な成果が得られた。			
【実績値】 論文等数 : 2件 黒坂貴裕「檜隈寺の調査(飛鳥藤原第176次)」『奈文研ニュース』No.47 2012.12 黒坂貴裕他「檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第176次」『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6 出土遺物 丸瓦15点、平瓦105点、土器2.5箱分、炭・燃えさし2点、骨片(歯)1点 記録作成数 遺構実測図12枚、写真(4×5)23枚			
【受託経費】 1,150千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8010

業務実績書(受託事業)

研No.20-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	京都岡崎の文化的景観保存計画策定調査(受託)((1)～⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤毅
【スタッフ】 小野健吉(前景観研究室長)、恵谷浩子恵谷浩子(研究員)、菊地淑人(特別研究員)、清水重敦(元景観研究室長)、松本将一郎(前特別研究員)			
【年度実績概要】 ・平成22年度から平成23年度にかけて文化的景観保存活用事業として京都市が実施している「京都岡崎の文化的景観調査検討事業」において、その調査成果のとりまとめを行うとともに、報告書の編集・刊行した。 ・平成23年度までの調査の補足として、家屋調査を実施し、図面を作成し、成果を取りまとめた。 ・(仮称)「京都岡崎の文化的景観」の重要文化的景観への選定申出のため、調査成果を踏まえた保存計画案の作成を行った。保存計画案は、「京都岡崎の文化的景観保存計画策定委員会」(第1回～第3回)において報告するとともに、各委員からの意見を集約し、修正作業を進めた。 ・京都岡崎の文化的景観保存計画策定委員会の議事録を作成した。 ・保存活用の取組の一環として、白川沿いの旧精麦工場(現・竹中庵)の一部について仮復旧を行い(24年12月17日)、公開イベント(24年12月24日)を実施した。			
			
竹中庵一般公開の様子		家屋調査を実施した西川家の外観	
【実績値】 刊行報告書: 1冊 『京都岡崎の文化的景観調査報告書』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課発行 実測野帳: 24点 デジタル写真: 537点			
【受託経費】 1,824千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8011

業務実績書(受託事業)

研No.20-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進)		
【事業名称】	相川地区文化的景観 景観変遷・景観構造調査(受託)((1)～⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤毅
【スタッフ】 小野健吉(前景観研究室長)、恵谷浩子(研究員)、菊地淑人(特別研究員)、 清水重敦(元景観研究室長)、松本将一郎(前特別研究員)			
【年度実績概要】 ・現地調査を24年7月13～15日と25年1月15～18日にかけて実施し、石造物の悉皆調査、観光に関する史料調査・ヒアリング調査を行った。調査の成果を踏まえ、図面作成等の上、調査成果報告書の原案を取りまとめた。 ・調査成果の公表・周知を目的として24年5月30日に相川地区で開催した市民対象の『相川の文化的景観調査報告会』において、調査成果の報告「相川の文化的景観の読み方と活かし方」(恵谷浩子)を行い、住民との議論を深めた。 ・平成22年度から実施している相川地区の調査成果を踏まえ、保存計画の素案を作成した。 ・「平成24年度 佐渡金銀山調査指導委員会 文化的景観専門分野」(第1回・第2回)へ出席し、調査成果や保存計画素案の説明を行った。 ・佐渡市世界遺産推進課が開催した「相川の文化的景観ワークショップ」(第1回～第5回)へ各回出席し、価値説明や市民との検討作業、成果取りまとめ等の支援を行った。			
			
石造物悉皆調査の様子		「相川の文化的景観ワークショップ」の様子	
【実績値】 調査成果報告書：1部 『相川地区 文化的景観 景観変遷・景観構造調査 中間報告書』(平成24年度) 報告会発表件数：1件 実測野帳：29点 デジタル写真：615点			
【受託経費】 3,000千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8012

業務実績書(受託事業)

研No.20-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進)		
【事業名称】	平成 24 年度長良川流域の文化的景観における伝統的家屋等総合調査業務委託 (受託) ((1)－⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤毅
【スタッフ】 小野健吉(前景観研究室長)、恵谷浩子(研究員)、清水重敦(元景観研究室長)			
【年度実績概要】 ・長良川流域の文化的景観における都市域等の価値付けのため、川原町地区を中心として代表的な伝統的家屋を複数選択し、所有者の同意が得られたものより順次詳細調査を実施した(本年度調査 13 件)。調査に際しては、調査票(建物の沿革、建築的特徴、復原考察、生活・生業との関連、価値評価)を新たに作成して実施し、併せて写真撮影を行った。 ・家屋調査の成果を踏まえ、伝統的家屋の地域の特徴や都市構造の変遷特製の分析を行った。 ・以上について、成果報告書として取りまとめた。 ・調査成果の公表・周知を目的に、岐阜市教育委員会主催の文化的景観ワークショップ(計 3 回)に出席し、長良川流域の文化的景観に関して説明するとともに、市民との意見交換等を行った。			
			
家屋調査を実施した木材商の表屋内部		金華公民館での文化的景観ワークショップの様子	
【実績値】 調査成果報告書：1 部 『平成 24 年度長良川流域の文化的景観における伝統的家屋等総合調査業務委託調査報告書』 実測野帳：32 点 デジタル写真：1364 点			
【受託経費】 1, 000 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8013

業務実績書(受託事業)

研No.21-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「発掘調査のてびき」作成に係る業務（受託）（(1)－⑧－ア）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】			
金田明大（主任研究員）、山中敏史（客員研究員）、井上和人（名誉研究員）、松井章、高妻洋成、山崎健（以上、埋蔵文化財センター）、杉山洋、小池伸彦、玉田芳英、渡辺晃宏、清野孝之、箱崎和久、青木敬、廣瀬覚、森川実、渡辺丈彦、海野聡、小田裕樹（以上、都城発掘調査部）、石村智、中村一郎、井上直夫（以上、企画調整部）、小野健吉、平澤毅（以上、文化遺産部）他			
【年度実績概要】			
・文化庁文化財部記念物課では、昭和41年に刊行した『発掘調査の手引き』の全面改訂版の作成作業を進めており、その委託を受けた奈良文化財研究所は平成17年度から5年間にわたる作業を行い、平成22年3月に『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編/整理・報告書編』を刊行した。			
・上記の2冊は集落遺跡の発掘作業と整理・報告書作成作業全般を対象としたものであり、平成22年4月以降、それ以外の遺跡を対象とする『発掘調査のてびき』の刊行に向けて、引き続き奈良文化財研究所が作成作業の実務全般を担当してきた。本年度はその最終年度にあたる。			
・本年度は7月と25年1月の2回、奈良文化財研究所でそれぞれ2日間にわたり、作成検討委員会作業部会を開催した。文化庁文化財部記念物課の担当者と地方公共団体及び大学等の委員とともに、「墳墓」「寺院・官衙」「生産遺跡」「城館」の4部会に分かれて、構成や内容についての検討を重ねた。			
・9月には文化庁で作成検討委員会を開催し、入稿予定原稿について指導と助言を受けた。			
・11月から数回に分けての入稿後、3回の校正を経て、25年3月に『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編』を予定どおり刊行することができた。			
			
		『発掘調査のてびき』作成検討委員会作業部会	
【実績値】			
公刊図書数：1冊			
文化庁文化財部『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編』2013.3			
作成検討委員会作業部会開催件数：2回			
作成検討委員会開催件数：1回			
実績報告書：1件			
「『発掘調査のてびき』作成にかかる業務」			
【受託経費】			
6,821千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8014

業務実績書(受託事業)

研No.22-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	大阪府安満宮山古墳出土品保存修理事業(受託)((1)～⑧～イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美(以上、研究員)			
【年度実績概要】 ・大阪府の安満宮山古墳から出土した鉄製品は、出土直後に応急的な保存処置が施されたが、その後、劣化が進行している状況にあった。本事業では、これら鉄製品の保存修理に先立って、現状の記録と劣化状態の調査(写真撮影、肉眼観察、顕微鏡観察、X線ラジオグラフィ、蛍光X線元素分析およびX線回折分析)を行った。 ・劣化状態の調査結果に基づいて、以下の保存修理を行った。まず、サビ汁及び新たに発生している粉状の褐鉄鉱などの腐食生成物を、メス、竹串、研磨装置、エアブレイシブなどを用いたクリーニングにより除去した。前回の修理に用いられたアクリル樹脂は有機溶剤で除去した。進行性の腐食を生じている個体については、クリーニング後、腐食の原因となる塩化物イオンを除去するため、セスキカーボネート水溶液に遺物を含浸した。含浸後は、純水でセスキカーボネート水溶液を洗浄除去し、メチルアルコールにて脱水置換した。メチルアルコールによる脱水置換後、十分な乾燥を行い、アクリル樹脂(商品名:パラロイドNAD-10V)を用いて含浸強化した。搬入時にすでに剥落していた破片及び解体によりいったん取り外した部位は、含浸強化後、接着剤を用いて接合した。また、遺物の取り扱い時に引っ掛かりによる破損が懸念される部分については、引っ掛かりを回避する程度の樹脂を補填した。 ・保存処理前、処理中及び処理後の各段階において、文化庁調査官及び考古の専門家と協議を行った。 ・保存修理作業と並行して、保存修理後も鉄製品を一定の低湿度環境下で保管し、展示にも用いることのできる安定台を製作した。また、鉄製品の安定した収蔵・展示を行うため、気密性の高い保管台座を製作した。			
【実績値】 保存処理点数:9件 事業報告書:1件 『大阪府安満宮山古墳出土品保存修理事業』			
【受託経費】 2,939千円			



X線透過撮影

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8015

業務実績書(受託事業)

研No.22-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	史跡大分元町石仏における劣化部分養生和紙への塩類の移動に関する研究(受託)((1)―⑧―イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、研究員)			
【年度実績概要】 - 大分市の史跡大分元町石仏は、軟弱な溶結凝灰岩から構成される段丘崖の底部に彫刻された磨崖仏である。冬期には石仏表面に多量の塩類(硫酸ナトリウム)が析出し、塩類風化による石仏の劣化が深刻な状況にある。 - 石仏には古くから覆屋(お堂)が設けられ、石仏表面は常に水分蒸発の場となってきたとみられる。そして、石仏表面で蒸発する周辺の浅層地下水は多量の溶質を含み、これらが乾季に塩として析出する際に石仏の塩類風化を引き起こすと考えられる。また、高湿度時期には塩が潮解して再び岩内部へ浸透するので、塩は石仏表層に濃集していると推定される。したがって、元町石仏保存のためには、石仏表面への水分移動量を減少させ、石仏表層の塩濃度を低下させることが肝要となる。 - 本研究では、石仏表面に和紙を貼り、水分蒸発と塩の析出の場を石仏から和紙表面に移すことで、さらなる塩類風化の進行を抑制しつつ、石仏表層の塩濃度を減少させることが可能であるのかを検討した。 - 制多迦童子と多聞天の2体の石仏表面に一定期間貼付(フェイシング)した和紙を回収し、それらを純水中に浸漬・攪拌して溶出した成分を分析した。また、浅層地下水についても主要な溶存成分の定量分析を行った。制多迦童子から検出された主要な陽イオンはナトリウム、カリウムで、主要な陰イオンは、塩化物イオンと硝酸イオンであった。一方、多聞天では、上記のイオン類の抽出量は少なく、硫酸イオンがやや多い値を示した。通常、石仏表面が水分で飽和していない制多迦童子からは、主として水溶性の塩類を形成するイオン種が検出され、石仏表面がしばしば水分飽和する多聞天からは、難溶性塩の硫酸カルシウムの起源となり得るイオン種が検出された。 - 以上の結果から、石仏表層に移動して、塩として析出し得るイオン種は、石仏の含水状態によって異なることが示唆された。また、いずれの塩であっても、和紙のフェイシングによって石仏表層の塩濃度を減少せしめ得ることが確認された。 - 現在の覆屋内は、冬期にも比較的高湿度であることが既往の調査で明らかとなっており、そのため塩化ナトリウムのように、比較的低い相対湿度環境下においてのみ析出する塩の析出は認められない。今後は、塩の除去と石仏表面における水分蒸発の抑制とともに、現在の環境下においては析出し得ないものの、湿度の低下によって析出し得る塩についても考慮して、石仏を保存管理する環境を検討する予定である。			
			
石仏表面に析出した塩類			
【実績値】 分析点数：26点 事業報告書：1件 『史跡大分元町石仏における劣化部分養生和紙への塩類の移動に関する研究』			
【受託経費】 300千円			

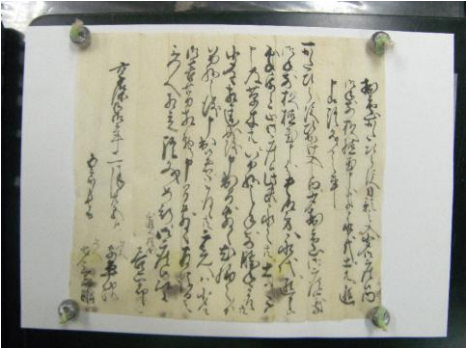
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8016

業務実績書(受託事業)

研No.22-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	被災文化財(水損資料)応急処置業務(受託)((1)~⑧~イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美(以上、研究員)、田中康成(連携推進課長)			
【年度実績概要】 東日本大震災により被災(水損)した資料の劣化の進行を防ぐため、クリーニング及び真空凍結乾燥等の応急処置を実施した。 - 被災地より回収した水損資料を、奈良市場冷蔵株式会社を通じて岩沼市及び奈良市に設置してある冷凍庫に搬入し、冷凍保管を行った。 - 冷凍保管を施した水損資料を奈良文化財研究所に搬入し、真空凍結乾燥を行った。 - 真空凍結乾燥した資料は、付着した泥及びカビのクリーニングを行った。塩分の潮解により吸湿する資料に対しては、超純水に浸漬して塩分を除去した後、再び真空凍結乾燥を行った。 - 紙力が低下したものや、装丁などの構造が複雑なものについては、株式会社工房レストアに委託して、抜本的な処置を施した。			
			
津波で被災した女川町木村家文書			
【実績値】 処置件数: 3件(毛利コレクション台帳類、女川町木村家文書、東北大学図書資料)			
【受託経費】 3,733 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8017

業務実績書(受託事業)

研No.22-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	被爆十字架の保存修理 (受託) ((1)－⑧－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美 (以上、研究員)			
【年度実績概要】 ・ 広島市の流川教会の被爆十字架を保存修理するにあたり、まず保存修理前の記録として、十字架表側の分割写真撮影を行った。ただし、炭が剥落する可能性があったため、十字架裏側の写真撮影は行わなかった。 ・ 十字架の炭化程度を把握するため、携帯型のX線透過撮影装置を用いてX線透過撮影試験を行った。その結果、炭化している部分の厚みは約1～2cmであることが明らかとなった。 ・ アクリル樹脂（商品名：パラロイドB72）の10%アセトン溶液を、面相筆や刷毛を用いて十字架表側の炭化した表面から浸み込ませた。アクリル樹脂溶液を浸み込ませた十字架は、1日放置して溶剤であるアセトンを十分に蒸発させ、アクリル樹脂を固化させた。このアクリル樹脂溶液の浸潤と固化を繰り返した。十字架表側の強化処置が終了した後、十字架を反転し、同様の方法で十字架裏側の強化処置を行った。 ・ 十字架裏側の強化処置が終了した時点で、十字架裏側の保存修理後の分割写真撮影記録を行った。その後、十字架を反転して、同様に表側の分割写真撮影記録を行った。 ・ 保存修理後の写真撮影記録後、保存修理前と同様に携帯型のX線透過撮影装置を用いてX線透過撮影試験を行った。その結果、強化処置に用いたアクリル樹脂が十分に内部にまで浸透しており、炭化部分も強化されていることが確認できた。 ・ 保存修理後の現状を、十字架の表裏の分割撮影写真と炭化程度と強化処置に用いた樹脂の浸透程度のX線透過撮影画像で記録した。			
【実績値】 保存修理点数：1件 事業報告書：1件 『被爆十字架の保存修理』			
【受託経費】 624千円			



流川教会の被爆十字架

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8018

業務実績書(受託事業)

研No.22-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	陸前高田市立博物館所蔵骨角器抜本修復業務(受託)((1)ー⑧ーイ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美(以上、研究員)			
【年度実績概要】 ・ 東日本大震災(とりわけ大津波)により被災し、奈良文化財研究所で応急処置を施し保管している、陸前高田市立博物館所蔵骨角器の恒久的保存と活用のため、当該資料の抜本修復を行った。 ・ 被災した骨角器について、素材の種類及び部位を同定した。また、骨角器の器種名を付与し、骨角器資料一覧を作成した。 ・ 骨角器はアルコール等の滅菌剤を用いて滅菌を行った。津波により付着したヘドロおよび重油などは、エチルアルコール、酢酸エチル、アセトンにより除去した。 ・ 骨角器に含まれる塩分を超純水により除去した。塩分の除去量を確認するため、イオンクロマトグラフィによる塩化物イオン濃度の測定を行い、塩分の除去後、遺物を損傷しないよう乾燥処置を施した。 ・ 脆弱な遺物に対しては、アクリル樹脂(商品名:パラロイドB72)の5%アセトン溶液を用いて強化処置を施した。 ・ 破損した資料で接合可能なものは、アクリル樹脂により接合を行った。 ・ 個々の骨角器の保存修復の記録を作成した。			
【実績値】 保存修理点数: 272 点 保存修復記録: 1 件 骨角器資料一覧: 1 件			
【受託経費】 1,440 千円			



津波で被災した貝輪

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8019

業務実績書(受託事業)

研No.23-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	史跡ガランドヤ古墳 1 号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究((1)－⑧－ウ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、研究員)			
【年度実績概要】 ・ 日田市の史跡ガランドヤ 1 号墳では、奥壁を中心に、装飾が描かれた石材表層の剥離が進行している。剥離による石材の劣化は、石材表面における結露の発生と乾燥を繰り返す「乾湿風化」と、それに伴う析出物の発生が主要因と考えられる。したがって、石材の劣化を抑制し、装飾を保存するためには、結露の発生を抑制することが重要である。 ・ ガランドヤ 1 号墳は、1913 年頃に封土を失って以降、石室が露出している。雨水の浸入防止のため、石材の目地は埋められ、1985 年以降は石室が防水シートに覆われた状態にあった。 ・ 本研究では、石室保護施設の設置によって石室周辺土壌への雨水の供給を断ち、あわせて石室内室空気の換気回数を制御することで、結露の発生頻度を減少させられるのかを検討するため、仮設の保護施設を建設して 22 年 11 月から環境調査を実施している。 ・ 本年度は、石室が防水シートで覆われた状態と、現在の保護施設に覆われた状態の結露発生頻度について数値解析を行い、結露性状を比較検討した。また、石室内室空気の年変動について数値解析を行い、外気の温度及び湿度との比較から、石室の公開に適した時期を推定した。 ・ 防水シートに覆われた以前の状態では、結露の発生箇所を変えながら、年間を通して結露が発生していたと推定される。一方、保護施設の設置後は、同時期における石室内室空気の絶対湿度が低下すること、大気に露出した石室石材の冬期における温度低下が抑制されることで、結露の発生頻度が大きく減少することが判明した。 ・ また、石室内室空気の数値解析結果と外気の温湿度の実測値を比較した結果、年に 2 回、5 月と 11 月頃に、両者が概ね等しい値を示すことがわかった。したがって、石室の公開を実施する場合にはこの時期が望ましいと考えられ、遺跡の公開活用に有益な知見を提供することができた。			
			
仮設保護施設内で露出する石室			
【実績値】 事業報告書：1 件 『史跡ガランドヤ古墳 1 号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究』 論文：1 件 奈文研紀要 2012「史跡ガランドヤ古墳における水の挙動に関する調査研究 3」			
【受託経費】 613 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8020

業務実績書(受託事業)

研No.25-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	ネットワーク型遺跡調査システムの開発(受託)((2)-②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】			
【年度実績概要】 - 独立行政法人科学技術振興機構(JST)の受託事業として、(株)ラング、岩手大学、宮古市教育委員会、(有)三井考測と共同で、東日本大震災復興関連の埋蔵文化財発掘調査における記録成果の質的な向上と効率化を目的とするネットワーク型遺跡調査システムの開発を実施し、技術及び行政的な観点から、開発担当である(株)ラングと岩手大学に助言を行った。 - 宮古市教育委員会が実施する発掘調査現場と本研究所の発掘調査現場などで、計測試験を実施した。 - これらの成果を受けて、次年度より本格化する復興調査の支援技術の選定と技術的な検討を重ね、三次元レーザースキャナーと写真計測を核とした現実的に導入が可能で、かつ効果が高い技術を、早期に発掘調査現場に投入することを計画している。			
			
発掘調査区での計測成果例			
【実績値】 計測試験地点：15 地点 研究発表：1 件 金田明大「現場ですべきこと、整理室でできること—迅速な発掘調査にむけた試行—」日本文化財科学会第 29 回大会、2012.6			
【受託経費】 184 千円			

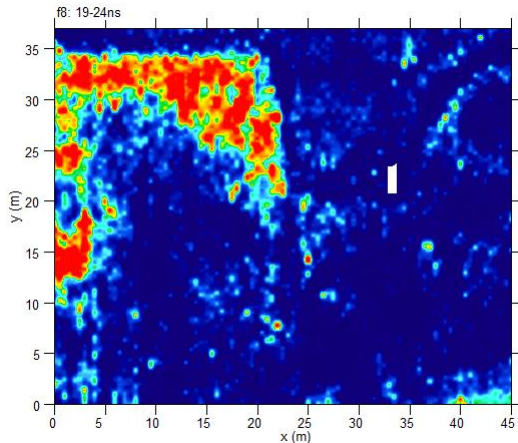
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8021

業務実績書(受託事業)

研No.25-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	周防国庁における総合的探査(受託)(2)－②		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 金田明大(主任研究員)、小澤毅(遺跡・調査技術研究室長)、西村康、西口和彦(以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 ・ 周防国庁(山口県)の中心部にあたる二町城地区と船所地区の2地区の計5地点を対象として、地中レーダー探査を行った。 ・ 二町城地区は、昨年度の探査成果を受けて、史跡整備時の盛土を除去した状態で再び探査を実施した。成果については現在解析中である。また、除去後の観察により、昨年度指摘された大きな段差は史跡整備以前の土地利用の状況を示していることが明らかとなった。 ・ 船所地区では広範囲の探査を実施し、港湾関連施設の可能性のある遺構の確認を目的とした。現在解析を進めているが、現地表に残存する岬状の突出部の周辺で護岸の可能性のある反射が明らかになるなど、今後確認が必要と考える地点を複数指摘できる見込みである。今後、より詳細な解析を進め、成果をまとめたい。			
			
船所地区の探査成果例(中央上が現存する岬状の張出部)			
【実績値】 探査実施地点: 5 地点			
【受託経費】 1,057 千円			

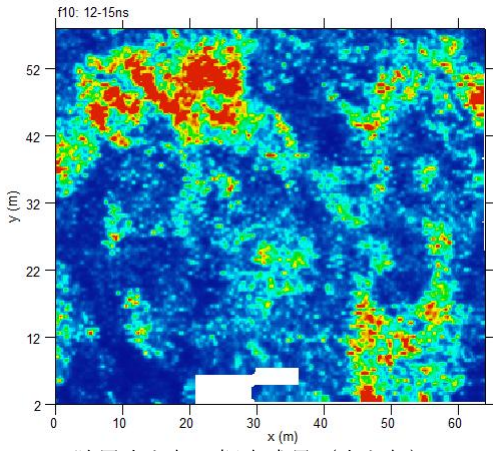
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8022

業務実績書(受託事業)

研No.25-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	地中レーダー探査(受託)((2)-②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 金田明大(主任研究員)、小澤毅(遺跡・調査技術研究室長)、西村康、西口和彦(以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 - 北海道森町に所在する砂原陣屋において地中レーダー探査を行った。まず基準点測量ののち、残存する土塁の内側のほぼ全面と土塁の外側の4地点について探査を実施した。 - 土塁の内側では、井戸などの可能性のある反射が得られており、現在、その詳細を明らかにするための解析作業を進めている。 - 土塁の外側については、西北角及び南側で外濠の存在を確認することができ、絵図などに残されている陣屋に関する情報と併せた検討が可能となった。			
 陣屋中心部の探査成果(中心部)			
【実績値】 探査実施地点：15 地点			
【受託経費】 1,420 千円			

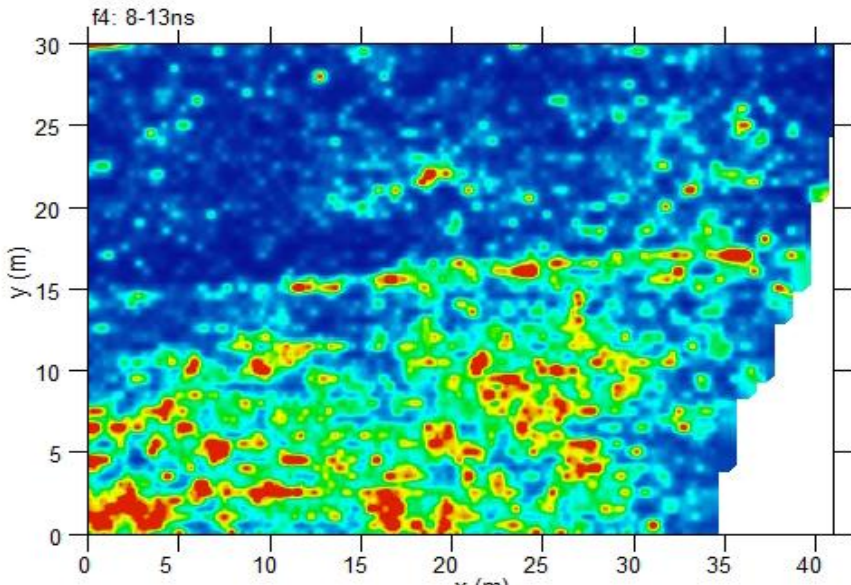
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8023

業務実績書(受託事業)

研No.25-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	天良七堂遺跡の総合的探査(受託) (2) - ②		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 金田明大(主任研究員)、小澤毅(遺跡・調査技術研究室長)、西村康、西口和彦(以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 ・ 6月と12月の2回にわたり、天良七堂遺跡(群馬県)の地中レーダー探査を行った。探査実施地点は、6月が10地点、12月は5地点である。 ・ 各地点で溝などの遺構の可能性のある反射が見られ、特に中心部では官衙北限の区画溝を確認することができた。 ・ 6月の探査成果については、12月に実施した発掘調査により、周辺の土壌に比べて軽石層(浅間山B軽石)で反射が強く、黒ボク層では反射が弱くなることが判明した。遺構の堆積土と探査成果との関係を確認することが可能となり、今後、周辺における成果の解釈に寄与する知見を得た。			
 探査成果例 (区画溝と推定される反射が見える)			
【実績値】 探査実施地点: 15 地点			
【受託経費】 1,278 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8024

業務実績書(受託事業)

研No.25-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	史跡備前国分寺における総合的探査(受託)((2)-②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	金田明大(主任研究員)、西村康、西口和彦(以上、客員研究員)		
【年度実績概要】	・ 備前国分寺は現在発掘調査と整備が進められているが、部分的な調査だけではなく、非破壊的手段を用いた全体の情報収集も必要であり、西回廊の詳細な状況の確認を目的とする地中レーダー探査を行った。 ・ 中心周波数は 400MHz のアンテナを用いた。 ・ 探査の結果、想定部分で礎石及び基壇と考えることが可能な反射を観察することができた。南門や中門の位置と規模といった問題を、地形図などとの比較や発掘調査による確認を踏まえつつ検討する必要がある。 レーダー探査成果(西回廊南側:右下の反射は南門の礎石か)。		
【実績値】	探査実施地点: 4 地点		
【受託経費】	375 千円		

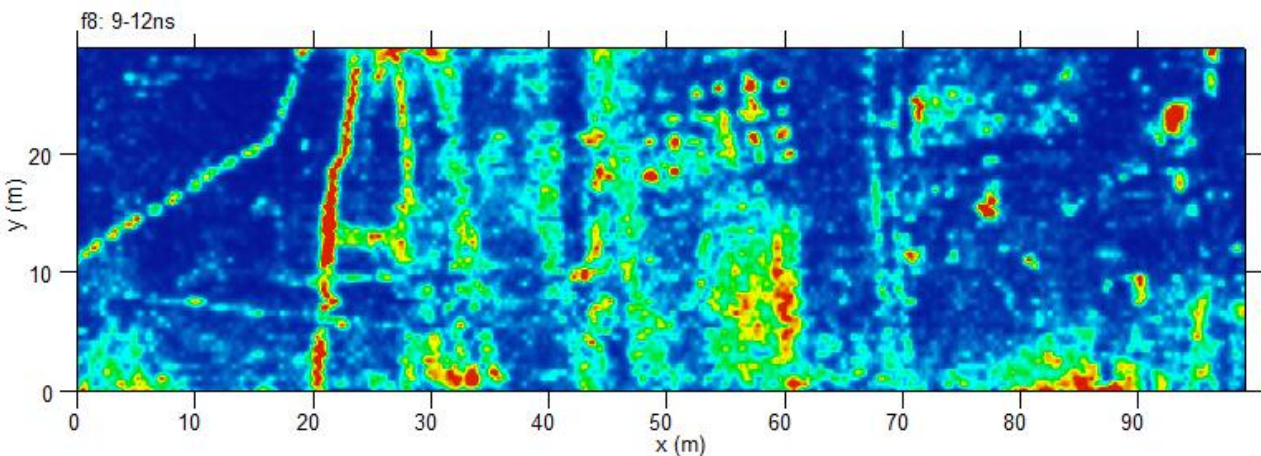
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8025

業務実績書(受託事業)

研No.25-6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	三軒屋遺跡総合的探査(受託)(2)－②		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大(主任研究員)、西村康・西口和彦(以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 ・ 三軒屋遺跡の遺構分布と範囲確認を目的として、主に正倉地区の西側の探査を行った。 ・ 南北の近接地区で総柱建物が発掘調査によって確認されている地区では、未知の総柱建物を確認すると同時に、正倉院の区画溝を明確に探査することができた。 ・ もう一つの課題である道路の確認については、現在検討を進めている。			
			
レーダー探査成果の一例(総柱建物及び区画溝を確認)。			
【実績値】 探査実施地点：4 地点			
【受託経費】 764 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8026

業務実績書(受託事業)

研No.27-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査業務委託（受託）（(2)－④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）			
【年度実績概要】			
・ 宗像市の田熊石畑遺跡では、弥生時代中期前半頃の6基の墳墓全てから、計15点に及ぶ銅剣、銅矛及び銅戈の青銅製品が出土している。しかし、墓域には発掘調査が行われていない墳墓も存在し、それらの墳墓にも青銅製品が埋蔵されている可能性が高い。 ・ 本研究では、田熊石畑遺跡の遺構土壌における熱水分移動解析を行い、埋蔵されている可能性のある青銅製品について現在の埋蔵環境を推定するとともに、それを改善する方法を検討する。 ・ 田熊石畑遺跡の墓域周辺は過去に削平を受けており、現在の地表面からわずか0.5 mほどの深さに青銅製品が埋蔵されていたことが判明している。こうした浅層の埋蔵環境は、地表の気象条件の影響を受けて大きく変化するため、埋蔵文化財には非常に過酷なものと考えられる。また、すでに発掘された上記の青銅製品について劣化状態を調査した結果、著しく腐食が進行していることも明らかとなった。したがって、未発掘の墳墓に青銅製品が埋蔵されていた場合、それらは現在も過酷な環境下に曝されていると推定され、埋蔵環境が遺物へ与える影響を緩和する措置が求められる。 ・ 本研究では、田熊石畑遺跡で地表から遺物包含層までの各土層の不攪乱試料を採取し、これらについて不飽和水分移動特性に関する試験を実施した。そして、得られた物性値と地方気象台が提供する気象観測データに基づき、遺構土中における熱水分移動解析を行い、現在の埋蔵環境を推定した。また、地表の気象条件が埋蔵された遺物へ与える影響を軽減するための暫定的な処置として、地表面への盛土とその厚さについて検討した。		遺構土壌の採取	
【実績値】 事業報告書：1件 「国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査業務委託」			
【受託経費】 451 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8027

業務実績書(受託事業)

研No.27-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成 24 年度小竹貝塚出土動物遺存体同定調査業務(受託)((2)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	山崎健
【スタッフ】 山崎健(研究員)、丸山真史、菊地大樹(以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 ・ 富山県の小竹貝塚(縄文時代前期)から出土した動物遺存体の種類や部位の同定を行った。 ・ 本年度は、B・C地区出土の合計 2,807 点の資料を分析対象とした。 ・ 魚類では、クロダイ属、マダイ、チダイなどのタイ科、エイ・サメ類、サケ属が多く、その他にコイ、フナ属を含むコイ科、アユ、コチ科、ボラ科、スズキ属、イシダイ科、サバ属、カツオ、ウシノシタ科、ヒラメ、フグ科を同定した。 ・ 哺乳類では、イノシシ、ニホンジカ、イヌ、イルカ類が多く、その他にタヌキ、ニホンノウサギ、鰐脚類を同定した。  小竹貝塚から出土したクロダイ属の骨			
【実績値】 分析点数：2,807 点			
【受託経費】 7,077 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8028

業務実績書(受託事業)

研No.33-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	水浸した日本画の修復方法に関する調査研究(受託)(3)－④		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 早川泰弘(保存修復科学センター分析科学研究室長)、森井順之(主任研究員)、朽津信明(修復材料研究室長)、早川典子(主任研究員)			
【年度実績概要】 ・ 水浸し、カビや金属部分に錆などが発生した軸二幅(両界曼荼羅)について、その修理方法についての調査研究を行った。 本年度は、作品の搬入、脱酸素封入を行なった後に、作品の損傷状態を調査した。水浸し後、乾燥までの期間が長かったため、全体にカビの発生が見受けられたほか、軸などに塩による錆の発生が確認された。また、カビは白色の胞子以外にも、黒色で作品に固着しているような状態も多く見受けられた。 このような状況を踏まえ、総裏紙を剥離しての修理を検討した。 しかし、水浸したにも関わらず、本紙の暴れや浮きが少ないことを考えると、水浸し以前の修理において伝統的な材料以外の接着力の高い材料を使用されていると見られ、このような処置をなされたものの剥離方法についての検討が今後の大きな課題となる。 作品の状態を確認しつつ、適切な有機溶媒の使用や温度条件などの検討を行い、来年度の修理作業への情報整理を行った。			
			
状態調査			
【実績値】			
【受託経費】 300 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8029

業務実績書(受託事業)

研No.34-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	絵金屏風の保存修理に関する調査研究(受託)(3)－⑤		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 早川泰弘(保存修復科学センター分析科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、早川典子(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、城野誠治(企画情報部専門職員)			
【年度実績概要】 本研究は、燻蒸時の事故により顔料の変色など作品の劣化が生じた絵金屏風の保存修理に関する調査研究である。 対象作品は、赤岡絵金屏風保存会所蔵の下記作品である。 高知県指定文化財(美術工芸品・絵画) 紙本著色 絵金図屏風 二曲一隻 5点 「勢州阿漕浦 平次住家」 「蘆屋道満大内鑑 葛の葉子別れ」 「鎌倉三代記 三浦別れ」 「八百屋お七歌祭文 吉祥寺」 「蝶花形名歌島台 小坂部館」 本年度は、変色の再現実験を中心に行った。本紙と同様の竹紙を用い、その上に本紙で使用されたのと同様の顔料を塗布後、本紙同様の燻蒸を行なうことで、劣化状況を追試した。 この結果、緑色の顔料の変色が再現され、また、これらの変色顔料上の pH が著しく低いことも確認された。			
【実績値】			
【受託経費】 200 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8030

業務実績書(受託事業)

研No.34-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	霧島神宮における彩色剥落止めの手法開発及び施工監理 (受託) (3)－⑤		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田 健
【スタッフ】 朽津信明 (保存修復科学センター修復材料研究室長)、森井順之 (主任研究員)、佐藤嘉則 (研究員)、早川典子 (主任研究員)、楠 京子 (文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、山田祐子 (文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 霧島神宮本殿彩色層剥落止め作業を行った。平成 24 年度の作業箇所は龍柱、手挟み、天井板絵である。本年度は、梅雨明けが遅れた影響もあり、施工箇所のカビ被害が見られた。そのため、天井絵については元の位置へ再設置するまで、湿度のコントロールできる環境にて保管した。 写真撮影、調査及び埃払いを行った後、HPC エタノール溶液、膠水溶液を用いて剥落止めを行った。また、必要箇所には MC・膠混合液を用いて剥離止めを行った。修理後に写真撮影による記録を取り、作業を完了した。			
			
修理作業			
【実績値】 受託事業報告書 1 件「霧島神宮における彩色剥落止めの手法開発及び施工監理」			
【受託経費】 1,354 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8031

業務実績書(受託事業)

研No.35-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	近代木製家具の修復技法及び材料に関する調査研究(受託)((3)－⑥)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 中山俊介(近代文化遺産研究室長)、早川典子(主任研究員)、山下好彦(任期付研究員)、池田芳妃(研究補佐員)、渡邊尚恵(研究補佐員)			
【年度実績概要】 本研究は、博物館明治村所蔵の近代木製家具(ポーツマス条約締結時に使用したテーブル)の修復技法及び材料に関する調査研究である。 対象作品は、くるみ材 テーブル 幅 1.2m × 長さ 4.3m × 高さ 0.78m 装飾の施された 6 本脚。天板の周囲に回り縁が付き、天板にはラシャが貼られている。 1905 年(明治 38 年)9 月 5 日にアメリカ東部ポーツマス近郊のポーツマス海軍造船所において小村寿太郎外務大臣とロシア全権セルゲイ・Y・ウィッテの間で調印された日露講和条約(ポーツマス条約)締結時に使用された。現在は博物館明治村の帝国ホテル中央玄関 2 階に展示されている。 研究内容 当該テーブルの展示運送の際に天板周囲の回り縁の側面 6 ヲ所(短辺 2 ヲ所、長辺 4 ヲ所)に生じた傷の修復方法に関して、所蔵者である博物館明治村の意向で、合成樹脂を使った現在普通に行われる家具の修復方法ではなく、伝統的な手法及び材料を用いた修復をするために以下の検討を行った。 木質文化財の修復には、日本における伝統的な修復の場合は木苧漆が使われることが多い。しかし、本作品は漆を用いた作品でないため、漆をもとにした手法を全面的に適用することは難しい。そこで、本研究では、文化財としての価値を損なうことなく、オリジナル部分への影響を最小限に抑える充填材や塗装材料及びその適用方法について検討を行い、修復を実施した。以下に使用材料等を記す。 充填は充填材の痩せを考慮して 3 回に分けて実施した。使用材料は抹香を水で練ったものに漆を加えたものを各回少しずつ配合比率を変えて使用した。また、欠損部の周囲の色の状態に合わせ、最後の充填材の配合比率を変更した。色調整にはシェラックと顔料を塗り合わせた物を使って行った。			
			
修復作業(損傷部の充填材の整形)			
【実績値】			
【受託経費】 395 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8032

業務実績書(受託事業)

研No.36-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務(受託)((4)－①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵(保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、中山俊介(近代文化遺産研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊 渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(主任研究員)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原紀子(客員研究員)			
【年度実績概要】 ・高松塚古墳壁画は微生物等の被害により、彩色が汚損されており、その処置が以前より検討課題になって来た。壁面上の汚れの除去については、今までは次亜塩素酸や紫外線照射による処置を行なってきたが、この手法は彩色のない無地の漆喰部分にのみ適用されるにとどまっており、顔料部分への安全な処置方法の開発が課題であった。本年度は、適切な酵素を選択することにより、汚れを分解し、彩色上の汚れを除去する方法について検討を行った。具体的には、効果が期待される酵素群に対し、顔料や剥落止め材料への影響の有無を確認した。その結果、顔料に対しての影響は確認されず、また、剥落止め材料については、影響を及ぼさない酵素を適切に選択することが可能になった。 ・高松塚壁画修理施設の作業室等において、定期的に害虫トラップを設置するとともに、浮遊菌調査を実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続している。また、これと並行して、修理作業室をはじめとした修理施設内各所における温湿度の測定も継続して行っている。作業室で再びチャタテムシが捕獲されたことから、地下ピット清掃を2月に予定している。 ・25年1月19日～27日に行われた一般公開の際に、高松塚古墳壁画と仮説修理施設についての説明を行った。 ・福岡県うきは市の装飾古墳(珍敷塚古墳、原古墳、鳥船塚古墳、古畑古墳、日岡古墳、重定古墳、塚花塚古墳)と宮若市の装飾古墳(竹原古墳、損ヶ熊古墳)において、温湿度の測定を継続的に行っており、データに基づき、それらの装飾古墳の保存環境やモニタリングの方法について検討を行った。			
【実績値】			
【受託経費】 41,361 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8033

業務実績書(受託事業)

研No.36-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査(受託)((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 岡田健(保存修復科学センター長)、佐野千絵(保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、中山俊介(近代文化遺産研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊 渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(主任研究員)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原紀子(客員研究員)			
【年度実績概要】 2010 年に壁画の取り外しが終了し、現在はその再構成のための調査研究を行っている。裏打ち材料の選定、強度に関する評価などを行なった上で、実際の作業に適用を図っている。本年度は天井の再構成を中心に検討し、作業を進めた。 ・キトラ古墳石室、小前室の点検を継続している(奈良文化財研究所 降幡) また、キトラ古墳の石室内や小前室などの温湿度の計測、及び古墳周辺の気象観測を継続的にを行っている(犬塚、森井)。 ・キトラ石室内の微生物制御のために 2009 年より実施されている間欠的紫外線照射によって、石室内の菌叢がどのように変化するのかを調査する目的で、今年度もキトラ古墳石室内の微生物総合調査を実施した(2012 年 9 月)。培養法と、DNA 解析による非培養法の両方によって現在解析を実施している(木川、佐藤)。 ・キトラ古墳覆屋の浮遊菌、付着菌調査を環境のモニタリングの一環として、今年度も実施している。 ・キトラ古墳小前室の擬土部分のビフォロンによる樹脂のメンテナンスを実施(25 年 3 月 13 日) ・キトラ古墳覆屋の除菌清掃を実施(25 年 3 月 22 日)			
【実績値】			
【受託経費】 37,299 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

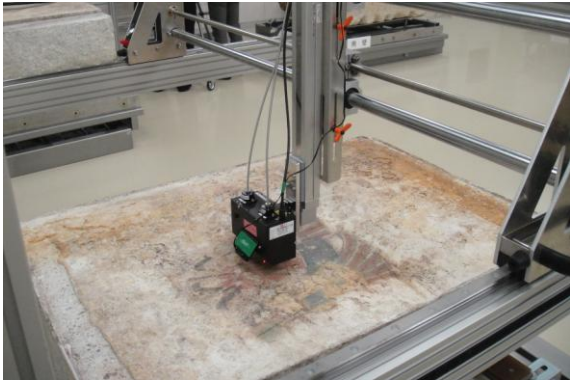
処理番号

8034

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研No.37-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（受託）（(4)－①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【年度実績概要】 ・石室解体事業に係る発掘調査の成果、出土資料・記録類の整理作業、石室石材の修理と安全な拘束の実施、安置法の検討、壁画の保存修復（劣化原因）に関する分析調査を進めた。 ・発掘調査の成果の整理作業としては、昨年度までに実施した石室石材の細部三次元計測、同高精度三次元計測のデータ整理を行い、画像処理したデータを図面として活用可能な状態に整えた。 ・一昨年度から継続している発掘調査中に実施した3D計測による石室解体事業のCG動画作成については、昨年までに不足していた石室解体作業工程の再現にかかるモデル作成を行い、最終的に古墳構築過程、石室解体作業工程の計2本のアニメーション動画として仕上げる事ができた。 ・版築土の粒度分析調査は、前年度に実施した粒度分布調査をもとに、発掘時に実施した強度との対応関係に関する調査を行った。 ・壁画の保存修理にかかる調査・研究としては、携帯型蛍光X線分析装置を用いた高松塚古墳壁画面の鉛分布及び顔料の調査を床石4・天井石1・4について実施し、高松塚古墳石材16石の測定を終了した。 ・可視・近赤外分光光度計による高松塚古墳西壁3（西壁女子群像）の顔料調査、漆喰表面へのカルサイト殻形成メカニズムに関する基礎研究を実施した。デジタルアーカイブスキャンニング（可視光、赤外）による画像記録を行った。 ・25年1月下旬の壁画修理施設の一般公開時に、解説員として研究員を派遣した。			
			
分光光度計による測定風景（西壁女子群像）			
【実績値】 論文等数：2件 学会・研究会発表等数：1件 降幡順子他「特別史跡高松塚古墳版築の剥ぎ取り資料による粒度測定」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012. 6. 29 廣瀬 寛「構築技術からみた高松塚古墳の横口式石槨」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所 2012. 10. 18 高妻洋成「テラヘルツ分光・イメージングによる文化財の調査」『光アライアンス』第23号第5巻 2012. 5			
【受託経費】 60,238 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8035

業務実績書(受託事業)

研No.37-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務(受託)((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 杉山洋、玉田芳英、降幡順子、廣瀬覚、若杉智宏、木村理恵(以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美、辻本与志一、赤田昌倫(以上、埋蔵文化財センター)、岡田健、早川泰典、木川りか、朽津信明、北野信彦、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則(以上、東文研)、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所)、相原嘉之(明日香村教育委員会)			
【年度実績概要】 ・都城発掘調査部では、特別史跡キトラ古墳の史跡整備計画作成において必要となる墳丘復元に関する考古学的知見を改めて検討、提供した。 ・整備にむけた石室封鎖前の最終的な考古学的調査として、石室南端及び墓道部分の精査、写真撮影を行った。 ・石材表面の加工痕跡に関して、拓本による記録作業を行い、石室内外の形状を記録するために、3D計測機により高精細データを取得した。 ・壁画の保存修復に関する分析調査では、携帯型蛍光X線分析装置を用いた壁画面の鉛分布及び顔料の調査を玄武像について、可視・近赤外分光光度計による顔料調査を白虎・青龍・玄武像について、デジタルアーカイブスキャンニング(可視光、赤外)による画像記録を玄武像、十二支子・寅像について、テラヘルツ分光イメージング画像による漆喰の構造調査を玄武・十二支寅像について実施した。発掘調査で出土した漆膜片に関する分析データを取得した。 ・石室封鎖前の石室石材の状態調査として亀裂・剥離部分の確認及び強度試験として針貫入試験を実施した。 ・2週間に1回、研究員による古墳石室内等のカビ点検作業を実施した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。			
			
			テラヘルツ分光イメージング画像測定風景 (玄武像)
【実績値】 論文等数 1件 学会発表等 1件 若杉智宏「キトラ古墳の墳丘形状」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所 2012. 10. 18 高妻洋成「テラヘルツ分光・イメージングによる文化財の調査」『光アライアンス』第23号第5巻 2012. 5 記録作成数 遺構実測図 16枚、写真(デジタル) 316枚			
【受託経費】 20,029 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8036

(様式 3)

業務実績書(受託事業)

研No.38-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	大和紀伊平野農業水利事業に係る埋蔵文化財発掘調査(受託)((4)―③)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】	石橋茂登(主任研究員)、若杉智宏、高橋知奈津、桑田訓也(以上、研究員)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)		
【年度実績概要】	調査地は藤原京右京七条一坊にあたる。工事区域の東端から西 10m分を東区、工事区域東端から西約 25～35mの 10m分を西区として発掘調査を行った。発掘調査期間は 25 年 1 月 21 日～1 月 30 日である。 東区では南北溝 1 条等を検出した。南北溝は、飛鳥藤原 62 次調査・168-9 次調査の遺構検出面と標高がほぼ一致しているが、埋土からの出土遺物が少なく、年代を確定することが困難である。東区の位置には、藤原京西一坊坊間路西側溝が通ると想定されており、今回検出した溝が西側溝にあたる可能性があるが、従来の調査成果から導き出した想定位置とはややずれる点に問題を残す。 西区では、南北溝 1 条、柱穴 2 基、土坑 3 基等を検出した。南北溝は、飛鳥藤原 62 次調査で確認している藤原京期の南北溝 S D 6511 の延長部にあたる。柱穴 2 基に関しては、両者とも埋土から方形の板材が出土した。板材の特徴からみて、これらの柱穴は同時期のものと考えられる。2 基のうち西側の柱穴は、飛鳥藤原 62 次調査で確認した藤原京期の南北堀 S A 6479 の延長ラインと位置が重なり、今回検出した柱穴 2 基は藤原京期の遺構である可能性がある。 本事業は、水路付け替え工事に伴う発掘調査で、狭隘な調査範囲ではあったが、上記のように埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。なお、調査終了後も調査地外の水路改修工事区域の立会を実施し、遺構状況の記録等を作成した。立会調査の期間は、25 年 2 月 14 日～3 月 6 日である。   東区全景(東から) 西区全景(東から)		
【実績値】	出土遺物 : 木器・木製品 2 点、土器・土製品コンテナ 1 箱 記録作成数: 遺構実測図 5 枚、写真(4×5) 8 枚、デジタル写真 46 枚		
【受託経費】	313 千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8037

業務実績書(受託事業)

研No.39-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業(受託)(1)－①		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 原本知実(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、原田怜(アソシエイトフェロー)、中山仁美(研究補佐員)、草薙綾(研究補佐員)、降旗翔(研究補佐員)、後藤多聞(客員研究員)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を12回、ワーキンググループ会合を1回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を2回開催した。コンソーシアム活動を広報するために、24年12月には、一般市民向けの公開シンポジウムを行ったほか、コンソーシアムパンフレット及び国際協力事業を紹介する冊子の作成、公式ウェブサイトのデータ追加を行った。さらに、ミャンマー、バーレーン、ミクロネシア等への協力支援を行ったほか、協力相手国調査としてフィリピン、スリランカでの調査を実施した。 コンソーシアムの企画・運営 ・運営委員会を2回開催して、活動方針等を協議したほか、25年3月には研究会と併せて総会を開催した。 ・企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米文化会を計回開催した。 ・ミャンマーワーキンググループ会合を1回開催した。 ・広報活動のため、事業紹介冊子の作成や、一般向けウェブサイトのデータ追加を行った。 情報共有と情報発信 ・シンポジウム「さまよえる文化遺産-文化財不法輸出入等禁止条約10年」を開催した。 ・研究会「文化遺産保存の国際動向」、「ブルーシールドと文化財緊急活動-国内委員会の役割と必要性-」を開催した。 ・報告書を3件作成した。(下記【実績値】の成果物ドキュメント名の①～⑤を参照) 文化遺産国際協力に関することから ・ミクロネシアのナン・マドール遺跡保護プロジェクトに対し、日本による国際協力事業の支援調整を行った。 ・協力相手国調査としてフィリピンとスリランカとミャンマーにおいて調査を行った。 ・バーレーンとミャンマーに対して文化遺産保護状況に関する事業の支援を行った。 ・世界遺産条約採択40周年記念最終会合ユースプログラムに参加し、文化遺産保護活動についての情報収集を行った。 ・第36回世界遺産委員会に出席し情報収集を行った。			
【実績値】 運営委員会の開催:2回、総会の開催:1回、シンポジウムの開催:1回、分科会の開催:(企画分科会4回、東南アジア分科会2回、東・中央アジア分科会2回、西アジア分科会1回、西アジア・欧州合同分科会1回、アフリカ分科会1回、中南米分科会1回)合計12回、ワーキンググループ会合の開催:1回、研究会の開催2回、諸国国際協力体制調査:フィリピンの文化遺産国際協力調査、スリランカの文化遺産国際協力調査、ミャンマーの文化遺産保護国際協力支援、バーレーンの文化遺産保護国際協力支援、ミクロネシアの文化遺産保護国際協力支援、文化遺産保護関係国際機関情報収集:世界遺産条約採択40周年記念最終会合ユースプログラム参加、第36回世界遺産委員会参加 (成果物ドキュメント名)①報告書『平成23年度協力相手国調査 バーレーン王国調査報告書 日本語』(2013年3月500部)②報告書『平成23年度協力相手国調査 バーレーン王国調査報告書 英語』(2013年3月500部)③報告書『平成23年度協力相手国調査 ミャンマー調査報告書 日本語』(2013年3月500部)④報告書『平成23年度協力相手国調査 ミャンマー調査報告書 英語』(2013年3月500部)⑤「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット」(2012年8月1500部)⑥「文化遺産国際協力コンソーシアムパンフレット英語」(2012年8月1500部)⑦「文化遺産国際協力事業紹介2012年度」(2013年2月2500部)⑧「文化遺産国際協力事業紹介2012年度 英語」(2013年2月2500部)			
【受託経費】 38,814千円			



第11回研究会『ブルーシールドと文化財緊急活動-国内委員会の役割と必要性-』
(平成24年9月7日撮影)

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8038

業務実績書(受託事業)

研No.39-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第36回世界遺産委員会審議調査研究事業（受託）（(1)－①）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】	二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）、境野飛鳥（文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）、原本知実（アソシエイトフェロー）		
【年度実績概要】	当該事業では文化庁からの委託により、24年6月24日～7月6日にロシア・サンクトペテルブルクで開催された第36回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。 (1)イコモスによる推薦物件に関する勧告内容の分析（24年5月上旬～6月上旬） ・議題8（世界遺産一覧表の改訂）の会議文書について、推薦資産の和訳を作成、世界遺産委員会の文化遺産の諮問機関であるイコモスからの勧告内容（記載、情報照会、記載延期、不記載）を一覧表とした。 ・イコモスによる評価書及び決議案の要約を作成、締約国が作成した推薦書も参照し、評価のポイントや妥当性、着目すべき点についてコメントを作成し、提出した。 (2)世界遺産委員会対処方針作成支援（24年5月下旬～6月中旬） ・議題7（保全状況の報告）について、イコモスによる評価書、決議案の要約を作成、イコモスの現地調査報告書や現地の専門家の意見も参考に、評価のポイントや妥当性、着目すべき点についてコメントを作成し、提出した。 ・議題11（パレスチナの資産に関する審議）について会議文書を要約、言及のあった遺跡の概要及び現状について文献調査を行い、提出した。 (3)世界遺産委員会での情報収集と議事概要の作成（24年6月下旬～7月上旬） ・第36回世界遺産委員会に参加し、本会議の全ての議題及びビューローミーティング、作業指針に関する作業部会で、発言者（国・組織）ごとに発言内容のメモを作成した。 ・以上のメモを議事概要としてまとめ、会期終了1週間後に提出した。 (4)審議における議論の内容及び決議の分析と提言、報告書作成（24年7月中旬～8月末） ・(3)で作成した議事概要に基づき、議題7、8及び13（作業指針の改訂）についてまとめ、決議の要約を作成した。 ・以上、及び上記（1）～（3）までで作成した内容を報告書としてまとめた。報告書の末尾に、審議の傾向、及び今後必要と思われる作業について簡略に記した。		
			
		「知床」の保全状況に関する世界遺産委員会での審議の様子（タブリーダ宮殿）	
【実績値】	作成報告書数 1件 『平成24年度文化庁委託 第36回世界遺産委員会審議調査研究事業』		
【受託経費】	2,646千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8039

業務実績書(受託事業)

研No.41-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（ブータン）（受託）（2）－①－イ・エ		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）、境野飛鳥（アソシエイトフェロー）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業 ・ブータン王国内務文化省文化局を相手国拠点とし、石造または版築造と木造との複合構造である同国の民家及び寺院等の伝統的建造物を対象として、それらの文化遺産としての歴史的価値付けと耐震性評価に向けた建築学的、構造学的調査、及び材料実験等を共同で実施することにより、効果的な技術移転と人材育成の促進を図ることを目的とした。 ・平成 24 年度は、以下の日程により 2 度の専門家派遣を行った。 24 年 5 月 27 日～6 月 8 日：建築工法及び構造調査（建築及び構造専門分野 6 名を派遣） 24 年 11 月 21 日～12 月 2 日：建築工法及び構造調査＋ワークショップ（建築及び構造専門分野 6 名を派遣） ・具体的には、首都ティンブー及びその近郊において、版築等の伝統的建設技法に関する現地調査や簡易的な実測、職人への聞き取りを行ったほか、廃墟となった版築造構造体を用いた引き倒し試験や民家及び寺院での常時微動計測、土壁供試体の圧縮強度試験等をブータン側と共同で実施し、建築的構造的評価及び解析のための基礎的なデータ収集を行うとともに、調査や実験の方法及び手順について、現地スタッフへの技術移転に努めた。また、第 2 回派遣時に開催したワークショップでは、我が国がこれまでに実施してきた同国の歴史的建造物に関する国際協力事業、並びに調査研究の成果を共有するとともに、日本における民家および伝統的建造物群等の保護に関する学術的行政的取組等について紹介し、ブータンにおいて今後目指すべき伝統的建造物とその技法に関する適切な保存継承と地震時の安全性向上という 2 つの課題の両立に向けて、様々な意見交換を行った。			
			
土色帳を用いた版築壁体の観察記録			
【実績値】 (1) 専門家派遣 2 回、現地ワークショップ 1 回			
【受託経費】 (1) 7,975 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8040

業務実績書(受託事業)

研No.41-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存」ユネスコ日本信託基金事業(受託)((2)-①-イ・エ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 友田正彦(文化遺産国際協力センター保存計画研究室長)、佐藤桂(アソシエイトフェロー)、石崎武志(副所長)、杉山洋(奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)副部長)、高妻洋成(奈良文化財研究所保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎(奈良文化財研究所保存修復科学研究室研究員)、石村智(奈良文化財研究所国際遺跡研究室研究員)、田代亜紀子(奈良文化財研究所国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 ハノイの都心に立地するタンロン皇城遺跡は、11世紀初頭の大越国建国以来、歴代の王朝が拠点とした宮城の中核域に関する遺跡である。指定対象としての遺跡は、2002年に国会議事堂建設予定地で発見された李・陳朝期の考古学的遺構と黎朝期以降の地上遺構を含む皇城中枢部の遺跡とで構成されている。その後、日越両政府の合意に基づき両国専門家による協力体制によって調査研究等が行われてきた。 本事業は、歴史・考古・建築・保存科学・社会学及び管理計画策定等の各分野専門家を現地に派遣し、ベトナム側専門家やハノイ・タンロン遺産保存センター、ハノイ国家大学ベトナム学社会発展科学院、社会科学院考古研究所、同都城研究センター等の現地関係機関との協力の下、同遺跡の歴史的文化的価値をさらに明らかにするとともに、今後のより良い保存に向けた技術的検討と保存管理体制強化を含む総合的支援を行うことを目的としている。 事業の第3年度である本年度は、以下の現地ミッションを派遣し、現地調査及び技術研修等を実施した。 24年7月25日～27日：保存管理計画班1名 24年8月5日～10日：保存修復班4名、保存管理計画班1名 24年8月18日～23日：歴史班3名、考古班1名、建築班1名、保存管理計画班1名(歴史学ワークショップ) 24年9月9日～13日：考古班5名及び保存管理計画班1名(第1回考古遺物ワークショップ) 24年12月26日～29日：保存管理計画及びGIS班2名 25年1月22日～27日：考古班5名及び保存管理計画班1名(第2回考古遺物ワークショップ) また、24年9月10日から28日までハノイ林業大学より研究者1名を招聘し、奈良文化財研究所ほかにて出土木材保存に関する共同実験を実施した。 なお、本事業は当初24年12月末までの予定であったが、効果的実施のために事業期間を1年間延長し、25年12月末までとする契約変更を行った。			
【実績値】 専門家派遣 7回 専門家招聘 1回 現地ワークショップ 5回			
【受託経費】 (102,905米ドル)			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8041

業務実績書(受託事業)

研No.41-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）（ミャンマー）（受託）（2）－①－イ・エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 亀井伸雄（所長）、友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）、邊牟木尚美（特別研究員）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）、原田怜（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山下好彦（保存修復科学センター任期付研究員）、城野誠治（企画情報部画像情報室専門職員）、難波洋三（奈良文化財研究所企画調整部部長）、森本晋（奈良文化財研究所国際遺跡研究室長）、高妻洋成（奈良文化財研究所保存修復科学研究室長）、降幡順子（奈良文化財研究所保存修復科学研究室主任研究員）、石村智（奈良文化財研究所国際遺跡研究室研究員）、青木啓（奈良文化財研究所考古第二研究室研究員）、庄田慎矢（奈良文化財研究所考古第一研究室研究員）、田代亜紀子（奈良文化財研究所国際遺跡研究室アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 （ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査） 本事業は、昨年の民政移管を経て本格的な文化遺産国際協力がようやく可能となったミャンマー国の現状を踏まえ、次年度以降のわが国からの支援策の方向性を明確化するため、同国における文化遺産、特に歴史的建造物、考古遺跡、壁画を含む美術工芸の 3 分野を対象として、技術的提案と検討を行うことを目的とした。具体的には、以下のような活動を実施した。 ・24 年 12 月 10 日から 14 日まで、ミャンマー国文化省の職員 5 名を日本に招聘し、同国における文化遺産保護の現状について情報収集するとともに、我が国の文化遺産保護関係の現場見学等も行いつつ意見交換した。この間、24 年 12 月 11 日には当研究所において「ミャンマーにおける文化遺産保護の現状と課題」と題する研究会を開催し、招聘者には各専門分野に関する発表をいただいた。 ・25 年 1 月 26 日から 2 月 3 日まで、建築、美術工芸、考古の 3 班からなる 17 名の専門家チームをミャンマーに派遣し、文化遺産保護に関する基本的情報をさらに収集するとともに、各種文化遺産のおかれた現状を実地で把握し、今後の保護に向けた課題や支援可能分野の明確化に向けた調査を行った。主な訪問地は、ヤンゴン、ネピドー、バガン、サレー、マンダレー、インワ、ザガイン、ベイトノー、タイエキッタヤー等である。 ・25 年 2 月 17 日から 23 日まで、ミャンマー文化省考古・国立博物館図書館局の考古学専門家 3 名を日本に招聘し、両国における考古遺跡の保存に関する意見交換と現場視察等を、奈良文化財研究所を中心に行った。			
【実績値】 現地派遣 1 回、招聘 2 回、研究会開催 1 回、報告書 1 冊「ミャンマー文化遺産保護に関する技術的調査報告書」			
【受託経費】 10,599 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8042

業務実績書(受託事業)

研No.42-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	海のシルクロードに関する観光研究(受託)((2)－①－イ・エ)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	国際遺跡研究室長 森本晋
【スタッフ】 石村智、田代亜紀子、佐藤由似(以上、国際遺跡研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、池ノ上真一(北海道大学観光高等研究センター)			
【年度実績概要】 本研究は、世界観光機構(UNWTO)の支援活動を行う財団法人アジア太平洋観光交流センター(APTEC)の要請を受け、「海のシルクロード」を活用した観光促進を目指し、観光研究の視点から海のシルクロードに関する調査研究を行うものである。2年目である本年は、以下の3つの項目に沿って研究を行った。 ・海のシルクロードと日本 中国大陸から日本列島に至るルートは海路しかなく、日本列島内においても、九州(博多・大宰府)に荷揚げされた文物の大半は、瀬戸内海の海路を経由して大阪湾(難波津)まで運ばれ、そこから陸路平城京へと運ばれたと考えられる。本年度は、日本列島内における「海のシルクロード」の主要ルートであった瀬戸内海に重点を置き、「海のシルクロード」を活用した瀬戸内海の観光促進の可能性について調査した。 ・交易品を通してみる海のシルクロード 「海のシルクロード」によって運搬されたものは、陶磁器、香辛料、銀など、時代や地域により様々に変化する。本年度は、中でも古代から近世にかけてのガラス及び陶磁器の交易ルートに注目し、南アジアと東南アジアの間の交易を考察する上で重要なインド東海岸における調査を行った。西はアフリカ大陸東岸部からインド南部を経て、東南アジア各地に至るまでの地域には、いくつかの特徴を共有したインドーパシフィックビーズと呼ばれるガラス製の小玉が大量に流通したことが知られている。調査では、このインドーパシフィックビーズの生産が行われていたとされるアリカメドゥ遺跡を中心に、カーンチープラム、マハーバリプラムなどの遺構から出土した考古遺物に注目し、これら考古資料を活用した文化観光の可能性を提案した。 ・海のシルクロード観光のあり方と可能性 主に瀬戸内海における調査成果を通し、観光を機軸とし、まずは日本国内の地域がどのように「海のシルクロード」を地域づくりにおいてとり入れ、活用できるか検証し、将来的な海のシルクロード観光のあり方と可能性を考察した。			
【実績値】 海のシルクロードと日本に関する国内調査(尾道・倉橋島・宮島・祝島・周防大島) 海のシルクロードと交易品調査(インド) 報告書「海のシルクロードに関する基礎的研究(2)ー観光学の視点から」2013.3			
【受託経費】 1,026千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8043

業務実績書(受託事業)

研No.42-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成 24 年度文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流) ミャンマーの文化遺産保護に関する技術的調査(受託)((2)-①-イ・エ)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	企画調整部長 難波洋三
【スタッフ】 森本晋(国際遺跡研究室長)、石村智、田代亜紀子(以上、国際遺跡研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、青木敬(考古第二研究室研究員)、庄田慎矢(考古第一研究室研究員)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)			
【年度実績概要】 25 年 1 月 26 日～2 月 3 日に、研究員 7 名をミャンマーに派遣し、文化省副大臣・歴史局局長、ヤンゴン国立博物館館長ほか面会、ミャンマーの文化遺産保護・調査研究の現状について聞き取りを行った。またヤンゴン国立博物館及び建設中のネピドー新国立博物館を訪問し、収蔵品の保存状況及び展示方法について視察し、担当者と意見交換を行った。さらに、パガン遺跡群、ペイタノー都城遺跡、シェリクシェトラ都城遺跡など地域の遺跡を見学し、現地の専門家と交流した。以上の現地調査を通じて、今後当該国に提供可能な国際協力のあり方を検討し、その結果を報告書に総括した。 25 年 2 月 17 日～24 日に、ミャンマー国文化省考古・国立博物館・図書館局の考古学専門家 3 名を招聘し、平城宮跡、藤原宮跡を始めとする日本の文化遺産見学を行うとともに、奈良文化財研究所での調査研究の状況の視察を行った。			
 パゴダが立ち並ぶパガン遺跡群の様子  奈良文化財研究所の土器整理室において 土器の復元方法を視察するミャンマー人専門家			
【実績値】 『ミャンマーの文化遺産保護に関する専門家交流成果報告書』2013.3			
【受託経費】 3,458 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8044

業務実績書(受託事業)

研No.42-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業（受託）（(2)－①－イ・エ）		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	国際遺跡研究室長 森本晋
【スタッフ】 石村智、田代亜紀子、佐藤由似（以上、国際遺跡研究室研究員）、杉山洋（都城発掘調査部副部長）、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）			
【年度実績概要】 本事業は、カンボジア文化芸術省と協力し、ポスト・アンコール時代の王都であったウドン遺跡及びロンヴェック遺跡、その近郊で発見されたクラン・コー遺跡を対象として、発掘調査研究に関する技術移転を行うことを目的とするものである。 ・クラン・コー遺跡及びロンヴェック遺跡における考古研修の実施 平成22年及び平成23年度事業において実施した考古研修をまとめるものとして、GPRによる地中探査の成果を基に、埋葬遺跡の範囲確認と遺跡の価値を評価する考古学的情報の収集を行い、カンボジア人若手研究者に対する研修を実施した。 ・ロンヴェック遺跡を事例とした遺跡地図作成技術の移転 ロンヴェック遺跡に対し、考古研修と連動して、緊急的課題とされる遺跡インベントリー作成のため、遺跡全体の踏査を行った。また、遺跡・遺構の分析を記録し、収集したデータを反映した遺跡地図を作成した。遺跡地図作成工程にカンボジア文化芸術省職員2名が参加することで技術移転を行い、成果品はカンボジア文化芸術省へ提供した。また、カンボジア人専門家を招聘し、日本において遺跡地図作成最終工程の研修を行った。 ・遺物保存処理実習の実施 クラン・コー遺跡及びロンヴェック遺跡において出土した様々な遺物を対象として、カンボジア人若手研究者を対象に、陶磁器、土器、金属製品、ガラス製品など、出土遺物別の分析及び保存処理に関する実習を行った。 ・クラン・コー遺跡の調査成果の報告 本事業により初めて発見されたクラン・コー遺跡について、国内外にその成果を広く発表するため、アイルランドにおいて開催されたヨーロッパ東南アジア考古学会国際会議第14回大会において、カンボジア人専門家と共に報告を行った。 ・ウドン遺跡及びロンヴェック遺跡周辺に対する保存管理計画検討会の開催 研修によって作成した遺跡地図と収集データを用いて、今後の課題とされているウドン遺跡及びロンヴェック遺跡周辺に対する保存管理計画検討会をプノンペンで開催した。			
			
		クラン・コー遺跡における考古研修	
【実績値】 クラン・コー遺跡及びロンヴェック遺跡における考古研修（24年8月、11月）：研修生12名 ロンヴェックにおける地図作成研修（24年8月、於：カンボジア。25年2月、於：奈良文化財研究所）：研修生2名 遺物保存処理実習（25年1月28日、於：プノンペン）：参加者約200名 ヨーロッパ東南アジア考古学会国際会議第14回大会における報告（24年9月19日～21日） ロンヴェック及びウドン周辺に対する保存管理計画に関する検討会（25年1月28日、於：プノンペン。）：参加者約200名 ロンヴェック遺跡地図 冊子（英語・クメール語）“The Discovery of the Krang Kor Site-Exploring into Post-Angkor Period” 2013.3			
【受託経費】 4,500千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8045

業務実績書(受託事業)

研No.43-1

中期計画の項目	5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金 シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業(受託)((2)-①-ウ・エ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	安倍雅史(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、久米正吾(アソシエイトフェロー)、森本晋(奈良文化財研究所国際遺跡研究室長)、金田明大(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究員)、木口裕史(株式会社パスコ)		
【年度実績概要】	現在、中央アジア5カ国と中国が、シルクロード関連遺跡の世界遺産一括登録を目指し、国境の枠を超え、様々な活動を行っている。この活動を支援するため、文化遺産国際協力センターは、昨年度より、ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業」に参加し、中央アジア各国で様々な事業を行っている。今年度は、カザフスタン共和国、キルギス共和国及びタジキスタン共和国において、考古遺跡のドキュメンテーションにかかる技術移転と人材育成を目的としたワークショップを開催した。  カザフスタンでの地下探査実習の様子 ・考古遺跡の地下探査に関するワークショップ(カザフスタン共和国) カザフスタン共和国では、24年9月19日～9月24日まで、考古遺跡の地下探査に関する2回目のワークショップを、奈良文化財研究所及びカザフスタン考古学専門調査研究機関と共同で実施した。ワークショップには、カザフスタン人専門家5名の他、キルギス人専門家2名及びウズベキスタン専門家1名の計8名が参加した。昨年に引き続き2回目のワークショップのため、今回は現場実習に重点を置き、アルマトイ近郊のボロルダイ古墳群(紀元前8世紀～紀元前3世紀)を調査対象に、レーダー探査(GPR)を実施した。 ・遺跡の測量に関するワークショップ(キルギス共和国) キルギス共和国では、24年9月19日から25日まで、遺跡の測量に関する2回目のワークショップを開催した。株式会社パスコの木口氏を講師とし、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と共同で実施したこのワークショップには、キルギスの若手研究者8名が参加した。昨年に引き続き2回目のワークショップのため、今回は現場実習に重点を置き、中世の都城址アク・ベシム遺跡を対象にトータルステーションを用いた測量実習を行なった。 ・遺跡の測量に関するワークショップ(タジキスタン共和国) タジキスタン共和国では、24年11月2日から7日まで、遺跡の測量に関する1回目のワークショップを開催した。株式会社パスコ木口氏を講師とし、タジキスタン文化省及びフルブック博物館と共同で実施したこのワークショップには、タジキスタンの若手研究者10名が参加した。測量の原理や方法論に関する座学の後、中世の都城址フルブック遺跡を対象にトータルステーションを用いた測量実習を行った。		
【実績値】	報告書1件： UNESCO/Japan Funds-in-Trust Project “Support for Documentaion Standards and Procedure of Serial and Transnational Nomination of Silk Roads in Central Asia” NRICP Tokyo Activities in Kazakhstan, Kyrgyz and Tajisitan 2012. ワークショップ参加人数：計27名；カザフスタン：9名、キルギス：8名、タジキスタン：10名		
【受託経費】	3,695千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8046

業務実績書(受託事業)

研No.43-2

中期計画の項目	5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金 バーミヤーン遺跡保存事業（受託）（(2)－①－ウ・エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史（文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）、久米正吾（アソシエイトフェロー）、鈴木環（特別研究員）、谷口陽子（客員研究員）、前田耕作（客員研究員）、ファビオ・コロombo（保存修復専門家）、岡崎甚幸（武庫川女子大学教授）、森本晋（奈良文化財研究所国際遺跡研究室長）、石村智（奈良文化財研究所国際遺跡研究室研究員）、脇谷草一郎（奈良文化財研究所）、田村朋美（奈良文化財研究所保存修復科学研究室研究員）、田代亜紀子（奈良文化財研究所国際遺跡研究室アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 2004 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保存事業に参画し、バーミヤーンの文化遺産保護のために様々な活動を実施している。本年度は、バーミヤーン遺跡保存に向けた調査研究、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と連携したアフガニスタンの考古学専門家の人材育成・技術移転を実施し、バーミヤーン遺跡の保存に向けた資料集を刊行した。 ・バーミヤーン遺跡保存事業 アフガニスタンのバーミヤーン遺跡において、アフガニスタン情報文化省と共同で「バーミヤーン遺跡保存事業」第 11 次ミッションを予定していたが、諸般の事情につき渡航を中止した。下記の作業については、次年度に延期して実施する予定である。 ①東大仏龕の西側に隣接する C(a)窟、C(b)窟、D 窟、D1 窟の壁画の保存修復処置の継続。②石窟の清掃。③フォーラードイ仏教石窟壁画の保存状態調査。④上記の作業を通じたアフガニスタン専門家の人材育成・技術移転。 ・考古学専門家の人材育成・技術移転 アフガニスタン考古学研究所よりアフガニスタン人専門家 2 名をキルギス共和国に招聘し、発掘研修を行った。（24 年 9 月 11 日～17 日）。キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と連携し、アクベシム遺跡において発掘研修を実施し、発掘、測量の方法や最新の機器の使用方法等についての研修を実施した。 ・第 11 回ユネスコ・バーミヤーン遺跡保存事業専門家会議への出席 アーヘン工科大学（ドイツ）で開催された専門家会議に出席し、調査及び保存修復成果の発表を行った。また、今後の保存事業の方針について、ユネスコ、イクロム、ドイツイコモス、アーヘン大学、イタリア、フランス隊との協議を行なった（24 年 12 月 10 日～12 日、アーヘン、3 名）。 ・本事業の枠組みで実施されたバーミヤーン谷の地形測量成果に関して、資料集を作成した。			
【実績値】 ①研修参加人数：2 名（アクベシム遺跡、キルギス） ②国際会議参加人数：3 名（アーヘン工科大学、ドイツ）			
【受託経費】 3,685 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8047

業務実績書(受託事業)

研No.43-3

中期計画の項目	5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（アルメニア及びコーカサス諸国等）（受託）（2）－①－ウ・エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 邊牟木尚美（文化遺産国際協力センター特別研究員）、有村誠（客員研究員）、藤澤明（客員研究員）、鈴木稔（帝京大学大学院）、関根恵梨子（保存修復専門家）			
【年度実績概要】 「アルメニアおよびコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、コーカサス諸国等の文化財保存修復専門家間のネットワーク作りに貢献し、幅広い技術交流、人材育成の促進を図ることを目的とした。本事業では、アルメニア共和国文化省と文化遺産保護のための協力に関する合意書にもとづき、アルメニア共和国歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復・調査研究活動を通じ、若手アルメニア人保存修復家の育成と技術移転を目指した。 ・ミッションの派遣 24年5・6月に第3次ミッション、24年11月に第4次ミッションを実施した。第3次ミッション及び第4次ミッションでは、アルメニア共和国歴史博物館にて歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復に関するワークショップを開催した（下記2参照）。ワークショップを通して、一連の保存修復処置に必要な知識と技術を習得し、専門家間の意見交換や情報共有を行った。 ・ワークショップ開催 24年5月下旬から6月上旬にかけて歴史博物館において、第2回目のアルメニア国内向けワークショップ「アルメニア共和国歴史博物館における考古青銅遺物の保存修復」を開催した。また、24年11月には第3回目となるアルメニア国内向けワークショップに引き続き、第2回目の国際ワークショップを開催した。 国内ワークショップには、歴史博物館からだけでなく国内の他博物館や研究所からも参加者があり、国内のネットワーク作りにも貢献した。また、国際ワークショップでは、グルジア（グルジア国立博物館）、イラク（イラク国立博物館）、カザフスタン（アーケオロジカル・エキスパティーズ）、キルギス（国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所）、ロシア（国立エルミタージュ美術館）から保存修復に関わる専門家を招聘し、意見交換及び技術交流を行った。 今年度のワークショップは保存修復をテーマとし、表面クリーニング、接着、欠損部の充填、科学分析等の実習を行った。			
			
			国内ワークショップ保存修復実習の様子
【実績値】 ①報告書1件：『アルメニアおよびコーカサス諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業』アルメニア歴史博物館所蔵の考古金属資料の保存修復・調査研究事業及びそれに係わる人材育成・技術移転のための協力（第3次、4次ミッション）平成24年度業務報告書 50冊 ②資料集1件：「アルメニア歴史博物館における考古青銅遺物保存修復ワークショップ」平成24年度資料集 50冊 ③ワークショップ参加人数：第2回アルメニア国内向けワークショップ参加者10名、第3回アルメニア国内向けワークショップ参加者8名、第2回国際ワークショップ参加者10名			
【受託経費】 13,466千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8048

業務実績書(受託事業)

研No.43-4

中期計画の項目	5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（キルギス及び中央アジア諸国）（受託）(2)－1－ウ・エ		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史（文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）、久米正吾（アソシエイトフェロー）、山藤正敏（客員研究員）、森本晋（奈良文化財研究所国際遺跡研究室長）			
【年度実績概要】 当事業は、文化庁の委託を受け、将来的な中央アジアの文化遺産保護を目標に、中央アジア若手研究者の人材の育成を目的とする。具体的には 2011 年から 2014 年までの 4 年間、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と共同で、キルギス共和国チュウ河流域の都城址アク・ベシム遺跡を対象に、「ドキュメンテーション」、「発掘」、「保存修復」、「史跡整備」に関する一連の人材育成を実施していく予定である。 事業の第 2 年目にあたる今年度は、「発掘」と「保存修復」に関するワークショップを 2 回実施した。 ・1 回目のワークショップは、「考古遺跡の発掘」と「出土遺物の保存修復」をテーマに 24 年 9 月 1 日から 9 月 17 日にかけて実施した。このワークショップでは、実際に中世の都城址アク・ベシム遺跡で発掘作業及び出土遺物の応急的な保存修復に関する実習を行なった。同ワークショップには、キルギスから 8 名、アルメニア、トルクメニスタン、カザフスタン、タジキスタンから 1 名ずつ、アフガニスタンから 2 名、計 14 名の若手専門家が研修生として参加した。 ・2 回目のワークショップは、キルギス共和国歴史文化遺産研究所にて「考古遺物の保存修復処置」と「出土遺物のドキュメンテーション」をテーマに 24 年 2 月 7 日から 2 月 13 日にかけて実施した。このワークショップでは、土器や石器、土製品の実測実習を行なうとともに、脆弱土器の強化処置、土器の復元、金属遺物の応急処置、骨製品の強化処置などの実習を行なった。このワークショップには、キルギス人研修生 8 名が参加した。			
【実績値】 ①文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」平成 24 年度業務報告書 ②研修参加人数：22 名			
【受託経費】 13,552 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8049

業務実績書(受託事業)

研No.44-1

中期計画の項目	5. 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)に係る国内支援業務(受託)((3)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	島津美子(文化遺産国際協力センター特別研究員)、川口雄嗣(アソシエイトフェロー)、田島さか恵(アソシエイトフェロー)、本郷浩志(事務補佐員)、松田泰典(客員研究員)		
【年度実績概要】	当事業は、独立行政法人国際協力機構(JICA)の委託を受け、主としてエジプト国大エジプト博物館保存修復センターにおける人材育成に係る以下の業務を行った。(1)計画策定支援、(2)研修支援、(3)専門家派遣支援、(4)国内支援委員会支援。 (1)研修計画策定会議を3回(24年4月、6月、9月)開催し、2012年度「保存修復人材育成プログラム」及び、25年度の保存修復分野の研修計画を策定した。また、プロジェクトの合同調整委員会(24年1月20日)に山内が出席し、プロジェクト実施の調整についての議論に参加した。 (2)保存修復センターのスタッフを対象とした人材育成研修に関して、必要な教材・資機材についての助言、資料作成支援及び翻訳、語彙集の作成を行った(カッコ内は開催時期と参加人数)。本格化した保存修復分野の研修のほか、保存科学分野や予防保存分野などの部門横断的な研修を引き続き支援した。 <現地研修(計12回)> 「第2回労働安全衛生研修」(24年5月、40名) 「保存科学概論研修Ⅰ」(24年5月、18名) 「専門家現地調査」(24年5月～6月、調査団員4名) 「博物館環境科学研修」(24年6月、18名) 「第4回所内移動・梱包研修」(24年7月、30名) 「国外視察研修」(24年9月～10月、5名) 「染織品研修Ⅰ」(24年10月、16名) 「保存科学概論研修Ⅱ」(24年11月、40名) 「第3回 収蔵品管理研修(第1期)」(24年12月、20名) 「第5回 所内移動・梱包研修」(25年2月、20名) 「彩色文化財研修」(25年2月～3月、16名) 「第2回学術研究シンポジウム」(25年3月、約200名) <本邦研修(計2回)> 「保存修復材料学研修」(24年8月～9月、10名) 「微生物管理研修」(24年10月～11月、3名) この他25年度上半期に実施予定の第3回労働安全衛生、文化財の診断技術・分析法、染織品Ⅱ、木材の各研修の準備を継続して行っている。 (3)上記研修の講師としてのJICA派遣専門家の推薦と研修支援、研修協力機関との調整を行った。また業務調整/研修担当の専門家に2日間の派遣前業務委嘱による研修(24年8月)を行うとともに、既に派遣されている長期専門家1名(保存修復研修計画)と短期専門家1名(保存修復)の活動に対し継続的な支援を行った。 (4)第1回国内支援委員会においてプロジェクトに関する技術的情報を提供した。 以上のほか、保存修復センターの運営体制や研修資機材の調達と管理についての助言、博物館の保存修復における技術情報支援支援を行った。		
【実績値】	報告書 2件(①～②) ① 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(上半期分)」 ② 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(下半期分)」 計画案 1件(③) ③ 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)2013年度研修計画(案)」		
【受託経費】	25,457千円		



保存修復材料学研修の様子

【受託】
(様式 3)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 8050

業務実績書(受託事業)

研No.48-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	日本／ユネスコパートナーシップ事業 (受託) (4)		
【担当部課】	研究室	【事業責任者】	副所長 大貫美佐子
【スタッフ】 大貫美佐子(副所長、(併)研究室長)、児玉茂昭(アソシエイトフェロー)、藤本雅之(アソシエイトフェロー)、石部千紗(アソシエイトフェロー)、堀田富美(研究補佐員)			
【年度実績概要】 (1) 途上国支援のための海外調査 ・国内無形遺産のインベントリー作成支援を目的に、昨年度に引き続きミャンマーの無形文化遺産の調査を実施した。本年度は、各種の儀礼などで演奏され、同国の文化上重要な位置にある、伝統音楽の実態並びに少数民族の文化について調査を実施した。 (2) 無形文化遺産保護の実態調査 ・南アジア(インド)：昨年度に引き続き、インド南部の伝統工芸に関する調査を実施した。無形文化遺産の継承、危機遺産の保護という無形文化遺産条約の精神に鑑み、本年度は、継承が危惧される更紗の伝統的な作成技術につき、集中的な調査及び記録作成を実施した。 ・オセアニア(パプアニューギニア)：アジア太平洋地域の中でもとりわけ言語多様性に富んでおり、その一方で社会的・経済的な要因により言語とそれを媒介として伝えられる口承による無形文化遺産の継承が危惧されているパプアニューギニアにおいて言語と口承による伝統及び表現の実態と記録・保護の状況についての調査を実施した。 (3) 研究者集会の開催 ・アジア地域の博物館で無形文化遺産を担当する研究者、及び欧米と日本からの無形文化遺産研究者をメンバーとして、24年8月6日から10日の間、タイ王国シリントーン人類学センターとの共催で研究者集会を行った。 ・調査研究の成果を公知し、無形文化遺産保護に対する理解を促進することを目的として、25年2月に無形文化遺産に関するシンポジウムを開催した。  タイにおける研究者集会 (4) 上記(3)の成果報告書を25年3月に刊行した。			
【実績値】 現地調査研究5回(海外5回) 研究者集会「International Field School Alumni Seminar Safeguarding Intangible Cultural Heritage in the Asia Pacific」参加者数4カ国11名 報告書「2012 International Field School Alumni Seminar Safeguarding Intangible Cultural Heritage in the Asia Pacific REPORT」(336頁、寄稿者19名) ウェブサイトアクセス件数 5,289件(24年4月1日～25年3月31日)			
【受託経費】 9,990千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 8051

業務実績書(受託事業)

研No.48-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成 24 年度 無形文化遺産保護パートナーシッププログラム（受託）（4）		
【担当部課】	研究室	【事業責任者】	副所長 大貫美佐子
【スタッフ】 大貫美佐子（副所長、（併）研究室長）、児玉茂昭（アソシエイトフェロー）、藤本雅之（アソシエイトフェロー）、石部千紗（アソシエイトフェロー）			
年度実績概要】			
(1) アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究 ・国内：24 年 5 月に山形県鶴岡市に伝承される「黒川能」の継承について、記録・調査を実施した。 ・海外：24 年 9 月にブータンにおいて、無形文化遺産保護の現状並びに無形文化遺産保護に係る法制度の調査を実施した。 24 年 12 月に開催された第 7 回無形文化遺産保護条約政府間委員会に邦人専門家 2 名を派遣し同条約の現状、課題及び影響に関する情報収集・分析を行った。			
(2) 無形文化遺産のネットワークの構築 ・アジア太平洋地域における無形文化遺産研究教育機関とのネットワーク構築の一貫として、タイ王国のシリントーン人類学センター（SAC）との間で相互協力協定（MOU）を締結した。 ・アジア太平洋地域への広範な情報発信を目的にウェブサイトの多言語化を進め、SAC の協力を得て本年度タイ語版を開設、さらにベトナム語版も作成し、日英と併せ四言語での情報発信を行った。 ・情報共有を促進するため、昨年度に引き続き、無形文化遺産に関わる調査・研究を行う研究者に関する情報収集・整理を行い、データベースを構築した。			
(3) アジア太平洋地域の行政官・専門家等を招いた国際専門家フォーラムの開催 ・無形文化遺産条約締結 10 周年を迎える時宜に鑑み、アジア太平洋地域における同条約の課題やインパクトを論じる国際フォーラムを 24 年 6 月にパリにて開催し、その成果を 24 年 9 月に論文集として刊行した。なお同フォーラムは 24 年 6 月 4 日～8 日まで同地にて開催された第 4 回無形文化遺産条約締結国総会に合わせ、その前日 24 年 6 月 3 日に開催した。			
(4) アジア太平洋地域の行政官・専門家等を招いた、研究等に関する研修の実施 ・本邦において無形文化遺産の保護と活用に資する方策の研究のためのワークショップを 25 年 2 月に実施した。			
			
25 年 2 月のワークショップの様子 1		25 年 2 月のワークショップの様子 2	
(5) アジア太平洋地域における無形文化遺産に関する資料収集 ・スタッフによる海外調査研究及び外部研究協力者による調査研究において随時資料収集に努め、また資料を有する国内外の研究機関との関係強化にあたった。			
【実績値】 現地調査回数 6 回（海外 4 回、国内 2 回） 論文集「The first ICH-Researcher Forum - The implementation of UNESCO' s 2003 Convention」（111 頁、寄稿者 10 名） ウェブサイトアクセス件数 5,289 件（24 年 4 月 1 日～25 年 3 月 31 日） 収集資料数 写真 2,562 点、動画 3 点、印刷物 241 点			
【受託経費】 51,941 千円			

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査委託（受託）（(4)－①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 深澤芳樹（副所長）、小池伸彦、箱崎和久、清野孝之、渡辺丈彦、山本 崇、黒坂貴裕、今井晃樹、鈴木智大、諫早直人、森先一貴、小田裕樹、番 光、石田由紀子、海野 聡、高橋知奈津、庄田慎矢、川畑 純、中川二美、井上麻香、松下迪生、中島咲紀（以上、都城発掘調査部）、林 良彦、清水重敏、大林 潤、松本将一郎（以上、文化遺産部）、高妻洋成、小澤 毅、金田明大、脇谷草一郎、児島大輔（以上、埋蔵文化財センター）、栗山雅夫（企画調整部）、上田浩司、田中康成、紅林孝彰（以上、研究支援推進部）、窪寺 茂（建築装飾技術史研究所）			
【年度実績概要】			
・ 概 要 奈良時代前期（Ⅰ－Ⅱ期）の第一次大極殿院を構成する、南門、東西楼、築地回廊の建物、及び大極殿院の地形等について、平成 22、23 年度に引き続き、発掘遺構や出土遺物の検討、また現存建築の分析等による復原検討を行った。さらに、宮殿や寺院を中心とする類型について、計 8 回の現地調査を行い、その成果を各検討に反映した。復原検討会は計 17 回開催し、その内容を収録した『第一次大極殿院復原検討会記録』を刊行した。主な検討内容を以下に示す。			
・ 礎敷広場と磚積擁壁以北の地形復原 これは地形そのものの復原だけでなく、各建物の基壇高を復原するための検討である。その結果、南面回廊北方については、東西楼の周辺に盛土を施した範囲やその標高が判明した。磚積擁壁以北は、基本的に北から南へ、中央から東西へ緩く下る地形であるが、大極殿の前面で南北勾配が急になることが判明した（第 38, 39, 41, 43, 46 回検討会）。			
・ 南門の検討 文献史料や絵画資料等の検討から、中軸線上に位置する奈良時代前半の門は二重門である可能性が高いことが判明し、構造形式を二重門とした。また絵画資料及び現存建築から、少なくとも日本では古代から近世まで重要な建物に入母屋造が用いられたと考えられ、屋根形式を入母屋造とした。昨年度までの検討成果に加え、宮殿の門についての平面の検討から、下層の柱配置を桁行 5 間×梁行 2 間、15 尺等間とした。上層の柱配置は構造的な安定などを重視し、桁行中央 3 間 15 尺、桁行端間及び梁行柱間 12 尺とした（第 33, 35, 40, 42, 44 回検討会）。			
・ 東西楼の上部構造の検討 屋根形式を入母屋造または寄棟造とする上で課題となる、屋根架構とその納まりの検討、また組物や天井の関係について検討した。その結果、復原案は入母屋造 1 案、寄棟造 5 案の計 6 案が考えられた（第 31, 47 回検討会）。			
・ 回廊の基壇高の検討 復原地形、礎石痕跡の標高、出土石材等を検討した結果、南面回廊の基壇上面は東西楼・南門際を含めて基本的に水平と考えられた。また基壇上面の標高を復原し、南面回廊北方及び南方の基壇高がおおよそ判明した。東・西・北面回廊についても、同様の検討を進めている（第 32, 34, 36, 39, 41, 46 回検討会）。			
			
			出土石材の検討風景（第 32 回検討会）
【実績値】			
・ 第一次大極殿院復原検討会開催数：17 回（第 31～47 回） ・ 類型調査：8 回（国内 2 回、韓国 2 回、中国 4 回） ・ 論文 4 件：高橋知奈津「回廊基壇際の地形の検討－第一次大極殿院の復原研究 8－」『奈良文化財研究所紀要 2013』2013.6（予定） 井上麻香「南面回廊基壇高の検討－第一次大極殿院の復原研究 9－」同前 中島咲紀「南門の構造形式・屋根形式の検討－第一次大極殿院の復原研究 10－」同前 中川二美「軒平瓦を利用した垂木間隔の推定－第一次大極殿院の復原研究 11－」同前 ・『第一次大極殿院復原検討会記録 5』・『同 6』の作成。			
【受託経費】 43,320 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8053

業務実績書(受託事業)

研No.71-1

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
【事業名称】	平城宮跡展示館建設にかかる展示可能な出土品の一覧整理業務委託(受託)((4)-①)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	企画調整部長 難波洋三
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや、渡邊淳子(以上、展示企画室研究員)			
【年度実績概要】 ・国土交通省が本年度(株)乃村工藝社に委託した「平城宮跡展示館映像展示基本方針策定他業務」のうち、「展示可能な出土品の一覧整理」について受託し、平城宮跡展示館詳覧ゾーンについての基本設計案中で展示予定とされた平城宮・京跡出土品について、今後の実施計画策定に資するよう、各資料の名称、画像、法量などを記したカルテカード化を行った。			
			
出土品カルテカード			
【実績値】 出土品カルテカード 260 枚			
【受託経費】 720 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8054

業務実績書(受託事業)

研No.76-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	関西大学博物館所蔵登録有形文化財埼玉県熊谷市上中条出土人物埴輪頭部 2 点の復元修理 (受託) (1)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 犬竹 和 (修復家)			
【年度実績概要】 本事業で復元修理を行った古墳時代の人物埴輪頭部は、明治時代に埼玉県熊谷市上中条の古墳から出土した資料で登録有形文化財に指定されている。この地域からは極めて類似した人物埴輪が、国指定重要文化財として東京国立博物館に所蔵されている。近年にいたって、以前の復元で使用された修復材料の劣化が認められ、特に使用されていた石膏や接着剤は経年変化による劣化が著しく、安全に保管することも儘ならないなど再修復を要する状態にあった。そこで、平成 18 年度から平成 23 年度までの受託調査研究で修復を行った同博物館所蔵国府遺跡出土の縄文鉢形土器や籠型土器などに引き続き、本資料の再修復を行うこととなった。今回の再修復でも指定文化財に準じる登録有形文化財の人物埴輪頭部が安全に保管できるとともに、さらに展示や学術研究に活用されることを目的とし、当受託調査研究で研究開発された石膏に代わる土器修復材料であり質感・耐久性などにすぐれた補修用擬土を使用して修復するとともに、支持台の作成を行った。 概 要 修復対象 2 点 修復概要 ・ 解体及びクリーニング 劣化した石膏やセメントなどの補修材料を超音波メスで除去。接着剤は有機溶剤を使用して除去し解体した。表面の汚れは蒸留水を少量綿棒に含ませて拭き落とした。 ・ 土器の強化 劣化して脆弱になった人物埴輪頭部破断面をアクリル樹脂で強化した。特に脆弱な部分 (底部) のみ表面の強化処理をした。 ・ 接合 アクリル樹脂を使用して破片を接合した。 ・ 復元 欠失部分に補修用擬土を充填し、常温で乾燥後、整形し文様を施した。55℃の定温乾燥機に入れ樹脂を硬化させた。 ・ 支持台の作成 桐材の台と支柱を組み合わせると人物埴輪頭部が安定して展示できるような支持台を作成した。			
【実績値】 受託事業報告書 1 件「関西大学博物館所蔵登録有形文化財埼玉県熊谷市上中条出土人物埴輪頭部 2 点の復元修理」 本事業は関西大学から委託			
【受託経費】 1,365 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8055

業務実績書(受託事業)

研No.77-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	平城宮跡歴史公園朱雀大路緑地遺跡発掘調査(受託)((1)－①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 小池伸彦・芝 康次郎・神野 恵・青木 敬・渡辺丈彦・川畑 純・石田由紀子・馬場 基・山本祥隆・箱崎和久・海野 聡・松下迪生・荒田敬介(以上、都城発掘調査部)、中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 ・概要 国土交通省の平城宮跡展示館の建設にともなう事前調査。平成 22 年度(第 478 次)・23 年度(第 486・488 次)からの継続事業であり、本年度は次の 3 次に分けて調査を実施した。第 491 次調査は 24 年 4 月 2 日～7 月 6 日、調査面積 1872 m ² 、第 495 次調査は 24 年 6 月 25 日～10 月 16 日、調査面積 1845 m ² 、第 502 次調査は 24 年 12 月 3 日～25 年 1 月 24 日。調査面積 424 m ² 。調査区は、南調査区(第 491・495 次)・北調査区(第 495 次)・東調査区(第 502 次)の 3 ヲ所に分かれる。 ・南調査区の成果 平成 23 年度の第 488 次調査区の南方に設けた調査区。第 488 次調査で検出した 3 棟の掘立柱建物の南端を確認し、それぞれの規模・構造とともに、3 棟が南端を揃えて建設されたことが明らかになった。また、左京三条一坊一・二坪を区画する三条条間北小路及びその南北側溝を、東西約 45m にわたって検出した。その結果、路面幅(約 5m)や側溝の幅(約 1.5m)が確定し、さらに浚渫を行った上で奈良時代後半まで機能していたことが判明した。そのほか、掘立柱建物 2 棟などを検出した。 ・北調査区の成果 平成 23 年度の第 486 次調査で検出した鉄鍛冶工房群の範囲を確認するために設定した調査区。新たに鉄鍛冶工房 1 棟を検出し、朱雀門のすぐそばまで工房区域が及んでいたことが判明した。また、鍛冶炉の構造や工房内の諸施設の配置方式などに関しても重要な知見を得た。 ・東調査区の成果 北新大池内の遺構残存状況を確認するために設定した調査区。東西方向のトレンチを南北 2 箇所に設けた。池底面の標高が南北調査区の遺構検出面より低く、また地盤改良剤が深く浸透していたため、北区では遺構は認められなかった。しかし南区では性格不明ながら 5 基の古代の土坑を検出し、池底南方では遺構が残存している見通しを得た。 ・まとめ 左京三条一坊一坪には築地塀などの遮蔽施設が設けられず、また建造物も希薄であることを確認し、一坪が広場のような土地として利用されていたことが明らかとなった。これは既往の調査でも指摘されていた知見であるが、広範囲の面的調査により、より強固な裏付けを得ることができた。			
【実績値】 論文等数 3 件 「平城京左京三条一坊一・二坪の調査－平城第 488・491・495・502 次」『奈良文化財研究所紀要 2013』2013.6(予定) 「平城京左京三条一坊一坪の調査(平城第 491 次)」『奈文研ニュース』No.46 2012.9 「平城京左京三条一坊一・二坪の調査(平城第 495 次)」『奈文研ニュース』No.47 2012.12 発表件数 2 件 第 491 次…記者発表 24 年 6 月 21 日。現地説明会 6 月 23 日(聴衆約 650 名)。 第 495 次…記者発表 24 年 9 月 13 日。現地説明会 9 月 15 日(聴衆約 650 名)。 (参考値) 出土遺物：瓦 173 袋(軒丸瓦 44 点、軒平瓦 22 点)、土器 24 箱、木製品 6 点(柱根)、金属製品 14 点(銭貨 3 点、釘・刀子など 11 点) その他：土馬 2 点、冶金関連遺物(鉄滓・鑄羽口・炉壁・金床石・砥石など) 38 箱、陶硯 3 点			
【受託経費】 54,794 千円			



第 491 次調査区全景(南東から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8056

業務実績書(受託事業)

研No.77-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	平城京跡左京二条二坊十五坪の発掘調査(受託)((1)－①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 芝 康次郎・石田由紀子(以上研究員)・馬場 基(主任研究員)・ 箱崎和久(遺構研究室長)・荒田敬介(特別研究員)、 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 ・概要 宅地造成に伴う事前調査。調査区は、宅地造成地内の道路予定部分と擁壁予定部分に設けた東西約45m×2～6m、南北約30×2mで、調査面積は約320㎡。調査期間は24年11月5日～12月14日である。 ・調査区の位置 調査地の平城京左京二条二坊十五坪は、奈良時代前半には藤原不比等邸及び皇后宮、後半には法華寺境内にあたると考えられている。調査区はこの坪のほぼ中心部にあたる。 ・検出遺構の概要 調査区が幅狭で建物の全容は不明であるが、掘立柱建物3棟以上、掘立柱塀2条以上、柱穴列6条以上、溝6条、土坑12基以上を検出した。検出面は全て床土下位の整地土上面である。遺構面の整地土上面は地表下110cm前後(標高62.0m前後)、地山(黄褐色粘土層)は、地表下130～140cm前後(61.7m前後)で確認した。検出遺構のうち、土坑9基は中世以降だが、その他のものは奈良時代に属する。遺構の保存状態は良好で、とくに西側では深さ1.2mにおよぶ柱穴を確認した。また柱根や礎板などの木製遺物も多数出土した。 ・遺構の変遷 遺構は重複関係や柱筋の位置から4期以上に区分できる。1期には南北を幅広の溝で区画する。この区画施設が埋められたのち、2、3期には南北棟や東西棟が建てられ、続く4期には再び東西塀によって、南北を区画する。1期の遺構は東西溝のみで全体像が不明だが、2期には南北の坪心をこえて建物が展開し、それが3、4期に東西棟に変化して、南北の坪心を塀によって区画する。 以上のような当該地の土地利用が判明し、その性格は明らかでないけれども、この坪の重要性がより高まったと言えるだろう。			
			
調査区西半全景(東から)			
【実績値】 論文等数1件:「平城京左京二条二坊十五坪の調査－平城第501次」『奈文研紀要2013』2013.6予定 出土品:土器コンテナ21箱(土師器・須恵器、硯)、瓦コンテナ145箱(軒丸瓦・軒平瓦、磚、平瓦・丸瓦多数)、 車輪石1点、柱根2点、礎板6点、 記録作成数:実測図(A2判)37枚、遺構写真(4×5)36枚			
【受託経費】 2,970千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8057

業務実績書(受託事業)

研No.78-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	甘樫丘地区遺跡発掘調査業務(受託)((1)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 森川実、清野孝之、山本崇、木村理恵、松下迪生(以上、都城発掘調査部)、栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 国営明日香歴史公園(甘樫丘)における事前調査(飛鳥藤原第177次)。調査地は公園内の3ヵ所にわたり、土盛による整備予定地をA区、資材置き場の予定地をC区とし、その間の斜面に狭小なB区を設けた。調査は24年12月3日より開始し、現在も継続中である。調査総面積は1036㎡。 A区 尾根頂上の調査で、調査面積は211.4㎡。 調査地はすでに大規模な削平ののち、現代の盛土で平坦化しており、現代の盛土直下は花崗岩の基盤層である。遺物包含層はすでに残らず、遺構は時期不明の石垣を一部で確認したにとどまる。遺物は出土しなかった。 B区 A区とC区との間に位置する東麓斜面の調査で、調査面積は24.3㎡。近・現代の盛土が厚く、掘削深度は最大で3mに達したが、遺構検出面・基盤層は確認できなかった。遺物はごく少量が出土した。 C区 もっとも大きな調査区で調査面積は803㎡である。 25年1月10日より重機掘削を開始する。全体に近年の地形改変が著しく、近代の盛り土が厚く堆積する。一部で川原石を並べた石群を検出したが、時期は不明である。そのほか、穴をいくつか検出した。 調査は25年度も継続する。			
【実績値】 出土遺物：丸平瓦・コンテナ1箱、土器・木箱1箱 記録作成数：遺構実測図19枚、写真(4×5)56枚			
【受託経費】 11,911千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8058

業務実績書(受託事業)

研No.78-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	藤原宮跡（法花寺水路改修）発掘調査（受託）（(1)－②）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 木村理恵、清野孝之、山本崇、森川実、松下迪生(以上、都城発掘調査部)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【年度実績概要】 橿原市教育委員会からの委託事業として、農業用水路改修工事に伴う発掘調査を実施した。対象地は橿原市法花寺町で藤原京左京二条三坊、三条三坊にあたる。工事区域が総長 115.8m であるため、余掘り 2.5m 分を含め、調査区は長さ 118.3m、幅 2.5～3m で設定した。全体の調査面積は約 356 m²である。全体の調査期間は 23 年 11 月 1 日から 23 年 12 月 11 日までである。重機掘削は北区と南区の 2 回に分けて行った。 調査区の大部分が現代の水路と重複し、遺構面が失われていたため、壁面での検出を中心に行った。当調査区付近は藤原京東二坊大路の推定地に当たり、その東側溝の推定位置が本調査区内に想定されているため、数カ所の拡張区を設定、平面での遺構検出を行うことにした。北区では東側に拡張区を 5 カ所設定し、南区では西側に拡張区を 2 カ所設定した。 北区では、土坑 3 基と南北溝 1 条を確認した。検出面はいずれも地山面である。調査区北端の東壁で検出した土坑は、検出面で径 1m 以上あり、出土遺物から古墳時代の遺構といえる。埋土を 50cm 掘り下げると土坑の径は 50cm となり、深さが 1.3m 以上あることから、素掘りの井戸の可能性も考えられる。他 2 基の土坑はそれぞれ離れた場所にあるものの、両者とも埋土に古墳時代前期の土器を多く含むことから、当該期に調査区周辺で土地利用があったことが明らかとなった。南北溝は、東拡張区で検出している。埋土に古代の土器を含むことから、古代の南北溝と考えられる。東二坊大路東側溝の推定位置付近であることから、条坊側溝の可能性は指摘できよう。 南区では、調査区西側の遺構面の残存状況が比較的良好であったため、北区で確認した南北溝と一連のものと考えられる南北方向の溝の一部を平面的に把握することができた。南区の南北溝からも古代の土器が出土している。 本調査区は現代の水路による攪乱や狭長な調査区という制約があったものの、古代及び古墳時代の遺構をいくつか確認した。以上のように、本事業では、水路付け替え工事に伴う発掘調査を円滑に遂行し、藤原京域の埋蔵文化財における基礎資料を得ることができた。			
 北調査区全景（北から）  古墳時代前期の土坑（東から）			
【実績値】 論文等数：2 件 木村理恵「左京二条三坊・三条三坊の調査-第 173-1 次」『奈文研ニュース』No. 48、2013. 3 木村理恵「左京二条三坊・三条三坊の調査-第 173-1 次」『奈良文化財研究紀要 2013』奈良文化財研究所 2013. 6(予定) 出土遺物 土器 3 箱、瓦類 1 箱、その他（木製品・石製品）2 箱 記録作成数 遺構実測図 22 枚、写真（4×5）67 枚			
【受託経費】 2,164 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8059

業務実績書(受託事業)

研No.80-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	平成 24 年度土井ヶ浜遺跡出土品写真撮影業務 (受託) ((1) - (2))		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	写真室技術職員 栗山雅夫
【スタッフ】 井上直夫 (写真室再雇用職員)			
【年度実績概要】 本事業は、平成 25 年度に刊行が予定されている国指定史跡土井ヶ浜遺跡の正式報告書『史跡土井ヶ浜遺跡-第 1 次～第 12 次発掘調査報告書-』の作成に伴い、山口県指定文化財でもある同遺跡出土品を高精度の機材と技術によって撮影し、資料化を図るものである。成果物の写真については、報告書に掲載するとともに、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムにおける展示や図録にも掲載し、記録資料としてのみならず普及活用資料としても利用されるものである。 撮影の対象としたのは、貝製品、石製品、青銅器、土器類の出土遺物、人骨資料の他、遺跡の近景や露出展示遺構である。 現地撮影業務を完了後、奈良文化財研究所写真室において現像調整を行い、最終画像データ作成を行った。これらの成果品については、奈良文化財研究所において RAW データ及び現像調整データを保管し、リサイズ調整済のものについては土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムにおいて保管し、報告書や展示業務で使用する事となっている。 これらの作業を現地に出向いて行ったことにより高精度の写真資料を作成できたが、それに加えて、同館学芸員の写真撮影業務や資料作成の質を向上する契機を提供できた。			
			
土井ヶ浜遺跡出土貝製指輪			
			
弥生土器集合写真			
【実績値】 1. ゴボウラ製軋型腕輪 (2 カット)、2. 124 号人骨搬出品 (3 カット)、3. 南海産腕輪 (2 カット)、4. マガキガイ製指輪 (1 カット)、5. 近海産貝製腕輪 (2 カット)、6. 小型玉状貝製品 (1 カット)、7. 貝製装身具 (1 カット)、8. 素材貝 (1 カット)、9. 石製装身具 (3 カット)、10. 垂飾製装身具 (2 カット)、11. 弥生前期土器 (1 カット)、12. 弥生中期土器 (2 カット)、13. 小型仿製鏡 (3 カット)、14. 人骨頭蓋骨 (1 カット)、15. 土井ヶ浜遺跡近景 (2 カット)、16. 遺構露出展示人骨出土状況 (3 カット) 同上撮影写真の現像調整済 TIFF・JPEG データ及びコンタクトシートを作成し納品。			
【受託経費】 199 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8060

業務実績書(受託事業)

研No.80-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	鳥取県西伯郡伯耆町坂長第7遺跡出土木簡の保存処理等の総合的研究(受託)((1)-(2))		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 山本崇(主任研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場基、降幡順子(主任研究員)、桑田訓也、山本祥隆(史料研究室研究員)、高妻洋成(埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(同研究員)、藤井裕之(埋蔵文化財センター年代学研究室客員研究員)、中村一郎(企画調整部写真室主任)、松井潔((財)鳥取県教育文化財団調査室長)、玉木秀幸((財)鳥取県教育文化財団文化財主事)			
【年度実績概要】 ・鳥取市坂長第7遺跡から出土した木簡について、最新の機器を用いた解読を行ってその歴史的な評価を確定し、また貴重な資料群を後世に残すために、木簡の状態に即した最適の手法による科学的な保存処理を行うものである。同遺跡から出土した木簡7点を対象とした。 ・本年度に実施した事業は、下記の通りである。 (1)水漬け状態にある木簡について、現物の熟覧のほか、赤外線テレビカメラ装置と赤外線デジタル写真を用いて検討を加え、現状の釈文案を作成した。加えて、実体顕微鏡による樹種の観察を行った。 (2)水漬け状態にある木簡の、カラー・赤外線デジタル撮影を行った。画像は、奈文研と(財)鳥取県教育文化振興財団の双方に保管している。 (3)上記の作業完了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施した。保存処理は、木簡の状態に応じて個別に検討を加え、真空凍結乾燥法、または高級アルコール法を採用した。 (4)保存処理後の状態を記録するため、(2)と同じ要領で写真撮影を実施した。 (5)保存処理後、(1)と同じ要領で再度釈読検討会を実施し、7点の木簡の釈文を確定した。 ・以上の調査の結果、保存処理により墨痕が鮮明になるものも多く、従来の釈読に加えて、さらに読みを進めることができた。調査成果のうち、保存処理前段階の成果の一部は、玉木秀幸「鳥取県坂長第7遺跡の発掘調査と木簡」と題して木簡学会第34回研究集会(奈良市、24年12月1日)において口頭報告した。成果の全容は、委託主体である(財)鳥取県教育文化財団に業務完了報告書の形で報告した。			
【実績値】 解読木簡点数 77 点、木簡の保存処理点数 7 点、デジタル写真 16 枚、赤外線画像 126 点			
【受託経費】 195 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8061

業務実績書(受託事業)

研No.80-3

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	鳥取県鳥取市高住平田遺跡出土木簡の保存処理等の総合的研究(受託)((1)－②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 山本崇(主任研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場基、降幡順子(主任研究員)、桑田訓也、山本祥隆(史料研究室研究員)、高妻洋成(埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(同研究員)、藤井裕之(埋蔵文化財センター年代学研究室客員研究員)、中村一郎(企画調整部写真室主任)、松井潔((財)鳥取県教育文化財団調査室長)			
【年度実績概要】 ・鳥取市高住平田遺跡から出土した木簡について、最新の機器を用いた解読を行ってその歴史的な評価を確定し、また貴重な資料群を後世に残すために、木簡の状態に即した最適の手法による科学的な保存処理を行うものである。同遺跡から出土した木簡等3点を対象とした。 ・本年度に実施した事業は、下記の通りである。 (1)水漬け状態にある木簡について、現物の熟覧のほか、赤外線テレビカメラ装置と赤外線デジタル写真を用いて検討を加え、現状の釈文案を作成した。加えて、実体顕微鏡による樹種の観察を行った。 (2)水漬け状態にある木簡の、カラー・赤外線デジタル撮影を行った。画像は、奈文研と(財)鳥取県教育文化振興財団の双方に保管している。 (3)上記の作業完了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施した。保存処理は、木簡の状態に応じて個別に検討を加え、真空凍結乾燥法、または高級アルコール法を採用した。 (4)保存処理後の状態を記録するため、(2)と同じ要領で写真撮影を実施した。 (5)保存処理後、(1)と同じ要領で再度釈読検討会を実施し、木簡2点の釈文を確定した。 ・以上の調査の結果、保存処理により墨痕が鮮明になるものも多く、従来の釈読に加えて、さらに読みを進めることができた。成果の全容は、委託主体である(財)鳥取県教育文化財団に業務完了報告書の形で報告した。			
【実績値】 解読木簡点数2点、木簡等の保存処理点数3点、デジタル写真8枚、赤外線画像20点			
【受託経費】 122千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8062

業務実績書(受託事業)

研No.80-4

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	鳥取県鳥取市良田平田遺跡出土木簡の保存処理等の総合的研究(受託)((1)－②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 山本崇(主任研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場基、降幡順子(主任研究員)、桑田訓也、山本祥隆(史料研究室研究員)、高妻洋成(埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(同研究員)、藤井裕之(埋蔵文化財センター年代学研究室客員研究員)、中村一郎(企画調整部写真室主任)、松井潔((財)鳥取県教育文化財団調査室長)、高尾浩司((財)鳥取県教育文化財団文化財主事)			
【年度実績概要】 ・鳥取市良田平田遺跡から出土した木簡について、最新の機器を用いた解読を行ってその歴史的な評価を確定し、また貴重な資料群を後世に残すために木簡の状態に即した最適の手法による科学的な保存処理を行うものである。同遺跡から出土した木簡のうち、既に保存処理が行われている1点を除く11点を対象とした。 ・本年度に実施した事業は、下記の通りである。 (1)水漬け状態にある木簡について、現物の熟覧のほか、赤外線テレビカメラ装置と赤外線デジタル写真を用いて検討を加え、現状の釈文案を作成した。加えて、実体顕微鏡による樹種の観察を行った。 (2)水漬け状態にある木簡の、カラー・赤外線デジタル撮影を行った。画像は、奈文研と(財)鳥取県教育文化振興財団の双方に保管している。 (3)上記の作業完了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施した。保存処理は、木簡の状態に応じて個別に検討を加え、真空凍結乾燥法、または高級アルコール法を採用した。 (4)保存処理後の状態を記録するため、(2)と同じ要領で写真撮影を実施した。 (5)保存処理後、(1)と同じ要領で再度釈読検討会を実施し、11点の木簡の釈文を確定した。 ・以上の調査の結果、保存処理により墨痕が鮮明になるものも多く、従来の釈読に加えて、さらに読みを進めることができた。調査成果のうち、保存処理前段階の成果の一部は、高尾浩司「鳥取県良田平田遺跡の発掘調査と木簡」と題して木簡学会第34回研究集会(奈良市、24年12月1日)において口頭報告した。成果の全容は、委託主体である(財)鳥取県教育文化財団に業務完了報告書の形で報告した。			
【実績値】 解読木簡点数 11 点、木簡の保存処理点数 11 点、デジタル写真 20 枚、赤外線画像 108 点			
【受託経費】 195 千円			